毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治三十年二月廿五日發兌



第九拾六號

雨谷一菜庵編 ≡ 永井鳳僊密畫

少年史譚

第壹篇

阿部仲麿

菊判美製本
定價金六錢
郵稅金二錢

少年諸子の讀物にとて。毎月二回少年史譚を發行するには至れり。其事柄の面白き。其文の匂やかなる。其畫のいと麗はしき。今更いふもくだなるべし。

豫告 ＝

第貳篇 阿新丸。 中野三鷹子編
第參篇 新中納言知盛 雨谷一菜庵編
第四篇 六代君。 中野三鷹子編

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

再版出來發賣廣告

綠亭主人著

清少納言

定價金五拾錢　郵稅二錢

大なる二個の女星は、炳焉として王朝の碧落に懸りき、櫻の如き麗姿と、梅の如き清姿とは、双々相映して、愛に幾萬の鬚髯男兒を惱殺せしめたり、櫻の如き紫式部は已に櫻の如き麗筆に依つて、其の姿世に出でぬ、今や梅の如き清少納言は、又梅の如き清筆に依つて、其面影を現はさんとす、‖玲瓏たる彼の双眸は如何に鋭敏なりしか‖雪の如き彼の双腕は、如何に彤筆を弄したるか‖丹花の如き彼の朱唇は、如何に克く謂ひしか‖夜深かく紅燈の下、靜かに之を繙けば、蘭麝薰じ、美人來るの想ひあるべし、紫式部を讀むものは、必ず淸少納言を、讀まざるべからず

●讀賣評● 本書は王朝文學に於ける二大女星の一人にして枕草子の著者として今古の才名を馳せる淸少納言を評論せるものなり淸少納言が一條院の皇宮に仕へて香爐峯の雪は如何にありけるに「香爐峯雪撥簾看」の古時を想起して直に御簾を高く卷き上げ以て滿殿をして其才華機英に驚殺せしめるは人口に膾炙する所本書は納言が宮中に初參の當時如何に羞恥したる乎其の後如何に發達して遂には意氣軒昂男兒を壓するに至りし乎能く之を盡して又遺憾なきが如し今の閨秀小說家なるもの一讀して深く鑑みなば大に益する所あらん

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

内村鑑三著

警世雜著

定價金二十錢　郵稅四錢

●中央新聞評● 内村氏の論稿を募集したるもの日本人の短所を論じたる處特に見るべし流竄錄は以て氏が苦學の一斑を窺ふに足る文章一種の氣格あり

●日本新聞評● 滿腔の熱血を吐いて激語以て以て警せんとす内村鑑三氏の文は今や既に世に定論あれば之を云はず唐之を讀むの間知らず〳〵人をして肉躍り骨動くの感あるを皆ぐ

中 [illegible] 著

再版出來發賣

詩人西行

定價十二錢　郵稅四錢

●中央新聞評● 西行法師を歌人として傳評したるなり其の傳の證少く主もに西行の和歌によりて一代の略歷を述へ其の懷抱を拒せるも文章は流麗にして面白し

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

發行兼編輯人　吉崎圓吉
印刷人　金子佐平

明治三十年二月廿五日發行
家庭雜誌第九拾六號

目録


鳳仙画

家庭雜誌第九拾六號
（明治三十年二月二十五日發兌）

社説

婦人職業としての養蠶

我邦より外國へ輸出する産物中に於て、最高の金額に上るものは生絲にして、一昨二十八年の如きは五千萬圓に達したり。而して明治十八年より二十七年まで、十年間の輸出高を平均したる各府縣を比較すれば、長野縣第一等にして百十七萬一千十五斤、群馬縣第二等にして九十一萬八千七十九斤、福島縣第三等にして五十三萬三千九百十八斤、山梨縣第四等にして三十二萬四千六百九十三斤。其他第五等滋賀縣、第六等埼玉縣、第七等岐阜縣、第八等神奈川縣などの順にして、各々高下多少の差ありと雖も、日本全國中養蠶せざるの府縣は絶無にして、香川、青森兩縣の如きは、最下額に位すと雖も、二十七年に於ける前者の輸出額四千六百三十四斤にして、後者は三千五百十九斤なり。

蓋し養蠶の業たる、半ば婦人の手を要するが故に、養蠶業の盛大なる地は、婦人に自信あり、氣力ありて、卑屈ならず、陰險ならず、廻り氣多からず。其弊を言へば、往々驕慢に流るゝに在りと雖も、僻まず、臆せず、欝まず、偃れずして、性情の自然の儘に伸び〳〵したるは、婦人に職業ある地方の本色なり。吾人は如何なる土地に於ても生絲、茶、紡績を盛にし得べしと云ふ者にあらずと雖も、尤も婦人に適當なる職業を與ふるものは、生絲、茶、紡績ならんことを信ず。

都會の婦人には無職業なる者多し。故に人の妻となるも、正直無邪氣ならずして、表向きのみ屈從するもの多く、己れを利したる後は離縁するもの多し。妻にして尙ほ且つ然り、妾たるもの、婢たるもの、藝娼妓若

しくは銘酒屋楊弓店などの賤婦たる者知るべきのみ。彼等の性情は大抵人間にあらずして禽獸なり。而も彼等初めより禽獸的性情なるにあらずして、衣食住の必要ある彼等が生産的の手腕なき爲めに此に至れる思をへば、同情の涙潸々たらざるを得ざるなり。

吾人は新に崩御し玉ひし英照皇太后の御逸事を承るに、歌舞管絃等の浮華なるを斥け玉ひて、常に親ら宮女と共に養蠶に從事し玉ひしと。九重雲深き處に御不自由なき御身にして此の如し。市民の子女たるもの、何等の生産をも爲さず、徒衣徒食して可ならんや。吾人固より婦人職業の一斑として、養蠶を勸むるのみ、職業は種々樣々にして、吾人の好む所も亦一樣ならざれば、正經なる職業にてさへあれば、マッチ箱を張る可なり、書簡袋を作る可なり、裁縫可なり、機織可なり、各々其好む所に從事すべきなり。

婦人職業論は、吾人が從來、幾回も繰返したる所なれば、最早陳腐なるべし。されど陳腐なるの故を以て、默すべからざるは、小新聞の材料たる婦人の罪惡が、無職業に原因するもの十中八九なるを認めたれば也。

科學

海の世界

海中の植物の事

大洋の植物は陸上の植物に等しく亦植物學者、理學者及び美術家の注意を惹くに足る。海底には樣々の形せる植物あり、奇怪なる形の者、貴き物、或は壯麗比上もなき者等陸上に繁茂する熱帶植物にも勝りて水の世界に繁り合へり。海洋の植物界は陸上に比して其種類に乏しく其大サも陸上のものに比して稍劣る所あれども、自然は其報酬として小蟲の群捿より成る珊瑚の如き植物に類似せるものを與へ、陸上に比して更らに奇

怪なる、更らに活動せる、更らに驚くべき植物を生ぜしめたり。勿論此等の物は植物の形せる動物に非ずんば、動物の形せる礦物なりと雖も。

海中植物は殆ど「アルゼ」即ち海草の一種類に屬するなり、リンネアスは只此等の植物の五十種を擧げたれども、吾人は現今に於て二千種以上を知るを得たり。」

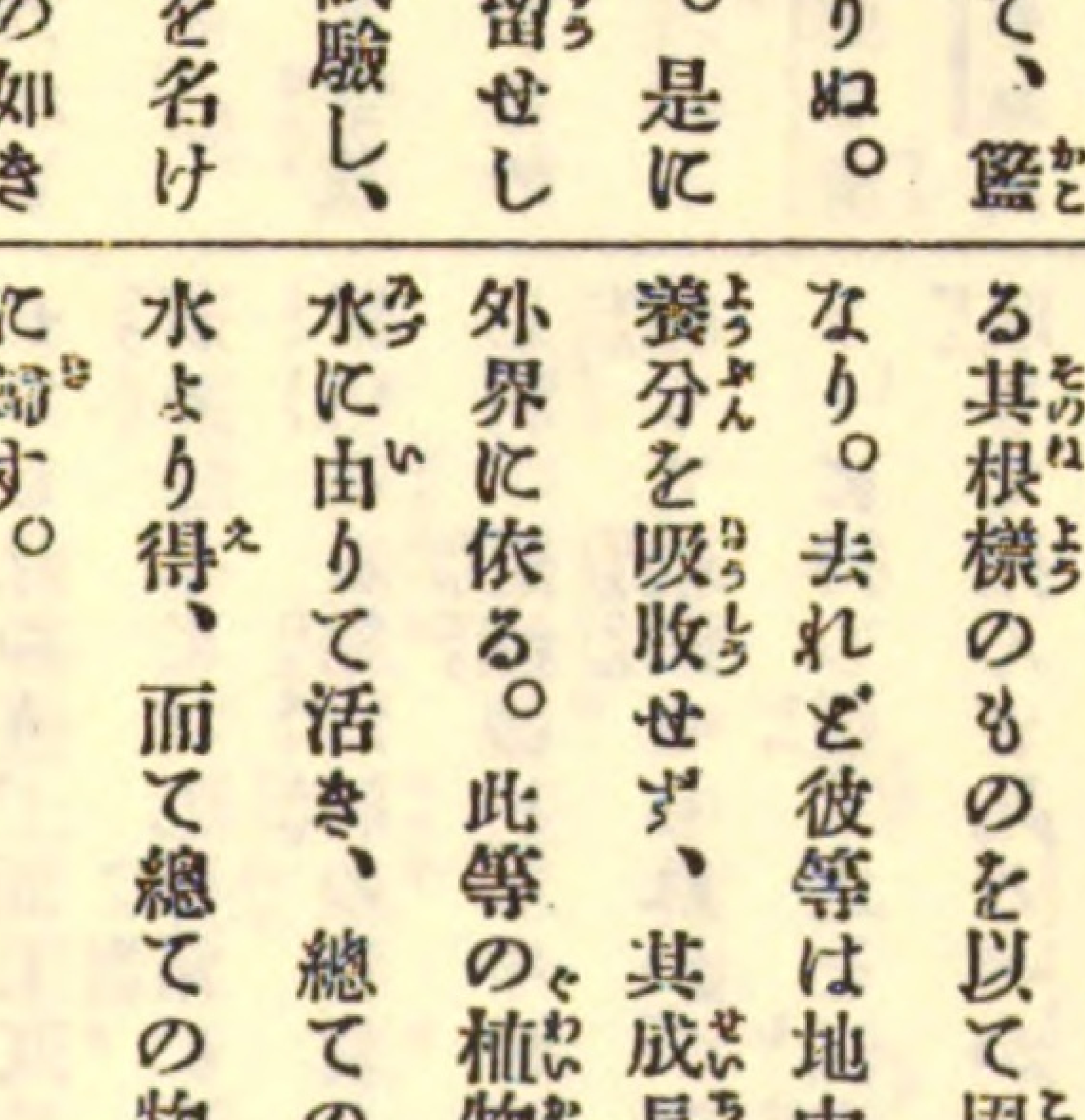
海中植物は温帶地方に於て最も其種類多く、最も繁茂し、赤道及び南北兩極に近くに從て次第に減小するの傾向を有す。

海中植物には又顯微鏡的微細のものあり。フレーシチツト氏及びチユレルル氏はルコン群島の一なるタヂヨ島の近海に於て三十五方哩にわたれる海水の深紅色を呈せるを見たり。此は全く方一吋に二千五百萬個を入るべき程の極めて微細なる一時植物(Minute plant)の群集に依るものなることを發見せり。これたゞ表面の現象に止まらずして海底深く達することありと云ふ。赤色の水は紅海に於て屢見る所なり、是れ其名の起りし所以にして、亦一時植物の群集に源因するものたり。

エレンベルク氏曰く『予は十二月十日に於てシナイ山に近きトールより一個の入江の全面血の如く紅色をなせるを見たり、而して海岸を繞れる珊瑚礁以外の水は蒼々として其色平常に異ならざりき。日中の間、波は紫色なる粘液躰の物質を海岸の砂上に打揚げつゝありしが、退潮後一時半の後には見渡す限りの海岸赤色の線もて繞圍せられぬ。予は其れを壜に入れて我「テント」に持ち還り之を試驗したるに、其海面の變色は肉眼もて殆んど見るべからざる程の極めて微細なる植物に由るなるとを知り得たり、この中には往々緑色の物を混ずれども其大部分は深紅色にして、而かも彼等の浮遊する水は全く無色なりき。予は顯微鏡に依りて此等の植物は纖維より成れるを發見せり、而して其長サ一吋の十二分の一あり、紡錘狀をなし粘着質のも

のに由て成る。晝間彼等は水面に浮び居たりしが夜間に至りて壜の底に沈下し、暫らくして再び浮びぬ』と。此海草を名けて赤色「トリコデスミアム」と云ふ。エベノット、チュポント氏は千八百四十三年七月十五日に於て眼界の及ぶ限りの海面赤色を呈せるを見たりと記せり。海面は焦茶色の物質にて掩はれ居たるを以て、鑑を其中に投じ、海水をくみあげ海綿にて壜に盛りぬ。翌日其物躰は深紫色に變じ、水は桃色を呈しぬ。是に於て金巾にて其水を濾せしに、物質は布片に殘留せしが、干きし時緑色に變ぜり。モンタグ氏は之を試驗し、其物質は前に記せる海草と同種の者となし、是を名けて「トリコデスミアム、エレンベルキ」と呼り。此の如き顯微鏡的微細なる植物に反して海中植物には又甚だしく巨大なる者あり。ハムボルト氏は長サ二百五十間に余る海草の海底より引揚げられたるを見たりと云ふ。海中植物は其種類少なく、陸上に於ける草木の森林山谷を飾るが如きに似ず。

彼れ等は根なるものを有せず。球形の物、或は卵形の物、管狀の物、或は扁形の物是等は全く根らしき物すら有せざるなり。然れども海底及び其他の物に附着せる植物は粘着質にて覆はれたる其根様のものを以て固着するなり。去れど彼等は地中より營養分を吸收せず、其成長は全く外界に依る。此等の植物は凡て水に由りて活き、總ての養分を水より得、而て總ての物、亦水に歸す。



トリコデスミアム、エレンベルギ

陸上の植物は其根に由りて營養物を土中より吸收するものなるを以て、彼等は肥沃の地に非らざれば生長する能はずと雖も、海中植物に至ては其固着する物と何等の關係を有せず、其石灰石たると花崗石たるとは彼

等に取りて何等の區別を要せざる也。故に彼等は如何なる物躰にも附着して生長し得るなり。此の點に於ては海中植物は珊瑚蟲、貝類と其性を等ふすと云ふべし。是等の海草は眞實の幹と云ふべきもの葉と稱すべきものを有せず、彼等は葉の代りに或は幅廣き、或は狹き或は直ぐなる薄片に由て生長繁茂するなり。是等の葉には波狀をなせる革紐の如きあり、縒れる針金の如きあり、或者は厚くして堅く、或者は薄くして柔軟なり。或者は小さき透明なる輕氣球の如く、或者は織物の如く、或者は寒天の片の如く、或者はなめし皮の帶の如く、或者は綠色の扇の如し。其表面は滑なるあり、光澤を有せるあり、粗なるあり、毛を有せるもあり。粘着質を以て覆はるゝ者、鹽芥の附着せるもの、甘き白粉にて包まるゝ者、貝殼にて掩はゝるゝもの。色には橄欖色なるあり、鹿子色なるあり、鳶色なるあり、稍黑きあり、綠色なるあり、淡紅色なるあり、洋紅なるあり。

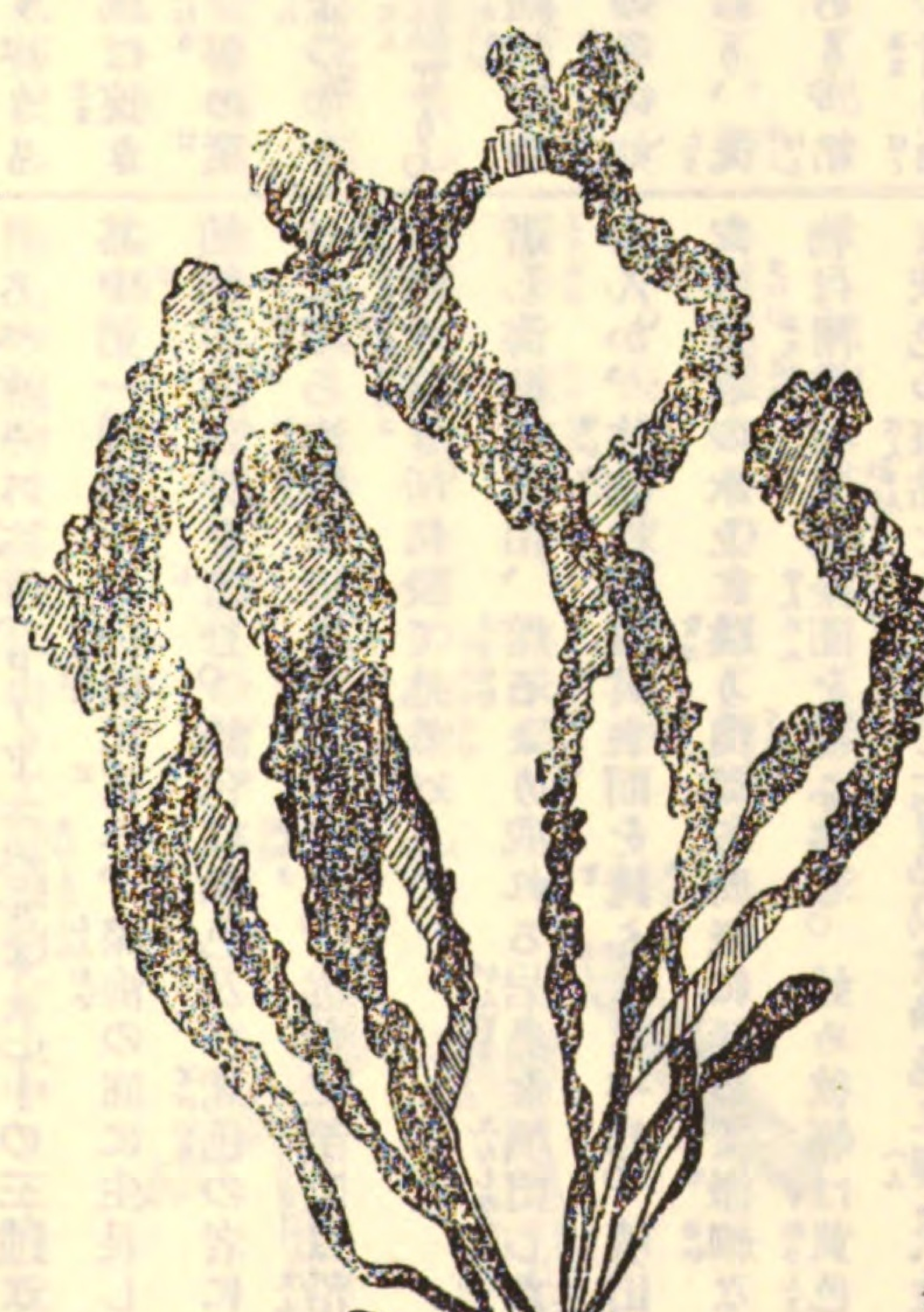
或る學者は以上の色に從て海中植物を三大區分に別てり。即ち—黑及び鳶色(メラノスペルムス)、綠色(クロロスペルムス)、赤(ロードスペルムス)—の三種なり。其中第一種最も其種類に富み、深海の底に生長し海底植物の大部分を占む。綠色は黑色及び鳶色の者に比すれば寧ろ海面に近き邊を漂遊す。赤色に至ては沿海の岸礁水淺き所に於て見るべし。

若し海底の火山、熔石より成れる岩島を噴出したりとせんか、生物は忽ち其表面を掩ふなるべし。噴出されたる岩石の水上に跳り出づる時既に極めて徴細なる植物は附着して其全面を覆ふべし。始め彼等は黃色か或は灰色の斑點をなし、次に靑色或は綠色に變じ、彼等の組織漸く復雜となる。此等の植物は成長するに從て其色は濃厚になり其の岩面を覆ふの厚さ漸く增進するなり。斯くて暫時にして彼等は薄き帶樣の者に由て掩は

るに至りて枯る、而してこれに繼ぎ稍や大にして更らに高等なる植物發生するなり。

堅固なる物躰に固着せず、海面に生長する大洋の植物は往々植物の島嶼を形成するとあり。去れど或は潮流の爲に名も無き海岸に打揚げられ、或は暴風の爲めに一朝にして解散せらるゝは此島嶼の運命にぞある。

ニューフオンドランドの南東アゾレスより程遠からざる海中に無數の海草の浮びて島の如きものをなせる所あり、名けてサルガッソー海と云ふ、其海草の「サルガスム」に屬するを以てなり。此海草の群は嘗てコロンブスをして航海の終局ならんことを誤想せしめしものなり。ヲベドは之を稱して「海草の野」と云へり。此近海を航行中の船舶は時に此等海草の群の爲めに非常なる勢もて圍まるゝとあり。見渡すかぎりの此海草の野は實にミスシッピーの大野に等しき三角形の面積に渡りて大洋中に浮遊するなり。



ウルバ

海面に浮漂する海草は時として小さき塊をなし時としては水の砂漠に於けるチーシスをなすとあり、此等の海草は海萵苣(ウルバ)と稱するものにして其大抵にして厚き葉は緑色を呈し往々黒がゝりたる紫色に變ずると

あり。
大洋の平原の特質は其種類の簡單なるにあり、陸上に於ては其種類極めて多數なるに係らず海上の植物は僅かに一二種に過ぎず。

海底は美しき植物の毛氈を以て殆ど隙き間無く敷かれてあり、此處に藪あり、疎林あり、花園あり、森林あり。陸上に於て處女の森は稀なり、去れど海底に於ては未だ男子の蹂躙を許さゞるなり。陸上の森林は切り倒され、根こぎにされ、或は燒かるれども、大洋の森林は非常の危險を冒して僅に數分間之を窺ふを得るのみ。

實に吾人は驚嘆せざるを得ず、幾萬年の昔より、毎年毎月、夜は終夜、晝は終日、或は潮流に由り、或は暴颶に由りて、五州洋の岸邊に打揚けられし海草山を成し丘をなし砂に歸し土と化するも、未だ曾て洋底を飾る海の森林に何等の減少を見ざることを。

史談

英國二大女詩人

岡田紫櫻

近世英文學史の地平線上に一頭角を表はし、「テニソン」に次ひで起りたりし一大女詩人「ロバルト、ブラウニング」夫人が結婚前の名は則ち「エリザベス、バーレット」孃なり。米國の批評家「エドモンド、ステッドマン」の如きは其「ヴィクトリヤ時代の詩人」なる著書に於て、希臘の女詩人「サッホー」を除かんには、孃「バーレット」は古今最大の女詩仙なりと論ぜり。倘ほ彼の有名なる佛國の文學者「テーン」も其英文學史に於て、孃に與ふるの贊辭に苦しみたる計りなり。此大女詩人は如何なる歷史を有するか。――比格的に平坦なる生涯

を歩みたりし孃の傳記は又格別に多趣なる記事を有せずと雖ども、乞ふ世界の文豪としての孃に付て、年の知れる處を記せしめよ。

孃は一千八百〇六年三月二日を以て、英國の「ダルハム」に生る。父は富有なる田舍紳士、母は敬虔なる信仰家なりき。孃の生れたりしは未だ其父の「モルトン」姓を名乘りし時なりき。されば孃は實に「エドワルド」、「モルトン」の第二女として、初めて此地球の上に呼吸せり。然るに孃が受洗（歐米にては生後一年內外の小兒に洗禮を施すの習慣あり）の頃には父「バーレット」家を繼ぎたるため「エリザベス」は「バーレット」の姓にて戶籍に入りたり。將來の大女詩仙「エリザベス」出生の後二年父母は家を「ハートホードシーア」に移して居りぬ。孃は幼にして、其天賦の性質のために、荒々しき遊戲を好まず、白薔薇を植ゆるなどの事を以て死上の快樂となせり。稍々長ずるに及んでは讀書に耽り、年未だ十を以つて數ふるに至らずして早く已に詩を勵し、句を綴るの法を學びたるに、父も孃の奇才を勵ましゝかば、其十四才たるの時にありては、保存の價値ある一詩をなせり。是れ即ち「マラソンの戰」にして、父の印刷に付せしものなり。鈍暗色の頭髮は小さき環狀をなして、愛らしき少女の青ざめたる顏に打ちかゝりつゝ、孃が「ホープ、エンド」の處女時代はいと樂しく送られたりし。十五才のとき偶然馬上より落ちたるため、元來蒲柳の質は著るしき影響を蒙り、孃は病身數年を經過したり。曾て「アレキサンドル、ポープ」が「人生論」を韻文にて書きたりし流に擬んで、「人心論」なる一大詩編を出せしは其僅かに十七才のときなりき。次で「バーレット」一家は事情止むなく、居を「ロンドン」の「グロセスター、プレース」七十四番地に移すに至れり。孃は兼て其盲師「ボイド」に就て希臘の古文學を修めて「アッチカ」の諸大文豪に通じ、殊に「エスキ

ラス」は其愛敬追慕措く能はざりし處なりしが、希臘文學は其同胞と共に之れを學びたりき。其纖弱なる身躰は血管破裂のため苦しき病を得、「デボンシーア」にありて靜養しつゝありしが、後二年其の最愛の同胞が「バビロン」灣に於ける溺死はいたく孃の心を衝き、病勢稍々重り行の狀を呈し、其「ロンドン」に歸るを得しは實に明る年なりしなり。然れども非常なる攝生用心は終に孃をして病勢の強きに服することを免れしめたり。是れより七ヶ年孃が「ロバルト、ブラウニング」に嫁するまでは、專心一意文筆の業に耽りぬ。ア、孃が蒲柳の質をして益す纖弱ならしめしものは主として、自家の嗜好せし處のものにありき。然れども元來活潑なる運動旅行を好まず、病を養ひて、閑々に日を送れば無聊の餘り、自ら文學の道に入るも止む可からざるのとなりしならむ。孃の親友に「ミットホールド」孃あり。孃が容姿を記して曰く、「躰はなよゝかにして細長く、鈍暗色の髮は如何にも意味ありげなる顏の兩側に垂れ、ハッキリとして大なる眼は柔和にして愛らしく、黑き眼毛にて圍まれつゝ、日光の如き笑みをたゝへたり」。と斯かる身躰と斯かる精神とを以て孃は其閑寓に七ヶ年の星霜を送りつゝ、其日常交はりし處は只二三の親友と古今東西の群書ありしのみ。一書の手に入るあらば、必ず之れを通讀するを以て慣とせり。性質順和多く語るを好まず、又談他人の上に及ぶを慊ひたれば、其話の題目は必ず文界のことにあらざれば古文學者、古書の研究批判なりしと云ふ。此間に表はれし詩の見るべきもの極めて多く一々擧ぐべきにあらず。又孃の詩集の出たりしも此時期にありき。

一千八百四十六年は此可憐の年少女詩人が一身の歷史に於ては大時期を作りしと共に、其後世に遺したりし詩にも一大變化を及ぼせり。是れ孃が其永年の病勢に打さ勝ちて、勇ましく勝閧を擧げ、次ひで、久しく其

意中の人なりし詩人「ロバルト、ブラウニング」に婚したるの曉なればなり。今日までは悲慘なりしもの此處に快活となり、今日までは暗黑なりしもの此處に光明を點じ來るに至れり。今は實に彼女が其理想の大半を成就なせしの時、如何でか歌はざるを得んや。彼女の詩は最早悲しからず、最早哀れならず、見るものをして何となく希望の片影を認め、喜悅の餘波を感ぜしむるなり。幸なる夫妻は相携えて以太利の美に歌ひたりしが、やがて一男兒をさへ擧ぐるに至りぬ。世には文學者と稱して理想の戀を說き、「ホーム」の神聖を談ずるもの多しと雖ども、之れを躬行するものに至つては甚だ稀れなるが、殊に我國の如きに於て然りとす。見よ女子は男子の文才を貴ぶの餘り、其己れに對する愛情の如何を問ふの暇あらず、如何にもして此人に一身を任するを得んと願ひ、男子は女子の幾分の文學あると其容色の美を愛で、一片眞情の燃ゆるなくして、此女と同穴の契をなさんなど思ふなれば、幸にして夫妻の儀式を終るを得るも、未だ三日ならずして、一旦の怒りに離婚の罪惡を犯すに至るなり。斯の如きは元より潔白なる「ブラウニング」夫妻に比すべきもあらずと雖も、我國民の間にも多少「ホーム」の神聖を味ひ得るものあるの日の近からんとは、實に願はしき限りにあらずや。婚後十ヶ年、以太利に於ける此一對の英詩人の生涯の如何に淸らかなりしか、如何に樂しかりしか。此點に於ては進步せる英米の國民すら尙は「ブラウニング」の家庭を賞歎せざるはなし。此間に於て彼女の著はせしもの「カサ、ギヂーの眺望」及び「ソンネッツ、フラム、ゼ、ポルトギース」(是れ彼女自身が其夫に對する戀を寫せるものを含めるもの大に人の情を動すものあり)の外に「ヲーロラ、ロイ」など數編ありて、就中「母と詩人」は有名なり。「ヲーロラ、ロイ」は無韻の詩にして、一千八百五十六年に出でし、一千行を有する

一大長編なり。女子の文各主として此編に因れりと云ふ。此詩は一個の小説的脚色の詩作に書かれたるもの、女子が自然に對し、婦人の職分に對し、この意見を吐けるところ甚だ多し。若し又其躰より云ふときは詩と散文の混合にして、其中には哲學あり、會話あり、されど全編を通ぜるものは高尙なる情操なり。

天元と此好女詩人に與ふるに蒲柳の質を以てし、今又餘命を貸さず、病床にある一週日にして、一千八百六十一年六月三十日、女史は「フローレンス」の客寓に永眠せり。ア、「カサ、ギヂー」の窓は依然として殘れども、最早再び此等の窓より眺むる美はしき女史の顔はあらはれざりき。「フローレンス」の市民は感激の餘り、女史が居寓の前に一つの石碑を立て、之れに書して曰く、「女子の愛情と、學者の知識と、詩人の精神とを結合統一し、且つ其詩によりて以太利と英吉利との間に結婚の約束として取り換はす、黄金の指環を作りたりし「エリザベス、バーレット、ブラウニング」は此處に歌ひ、此處に眠れり。」夫人眠りて、「ブラウニング」は其樂しき家を失ひしが、一千八百八十九年、即ち今を去ると僅かに八年前まで生存せしが、終に夫人と同じき王國の民となりぬ。

女史の人となりを表はせる、其文學を讀んで第一に感ずるものは深遠高尙なる情操なり。女史の詩をなす自然に出で、滿腔の赤心各句各字に發揮せるものあり。女史が曾て其生涯の眞面目にして嚴格なりし如く、其詩も眞面目にして嚴格なしり、決して一時の道樂文學にあらず。詩の終極の目的は快樂にありなど思ひたる事なく、又詩人の時を閑散なるものなりと思ひたるとなし。と云ひたりしを見るも其如何なる詩人なりしかを知るに足らん。大英百科全書の評に「女史の歌は熱情のために雄辨なる活ける聲なり」(" Her song was a living voice, eloquent with passion.") と云へる、能く

短言にして英史の殊長を指適せるものなり。其「カサ、ギヂーの眺望」の如き、女史の眞相を表はしたるものなりと云ふべし。一千八百四十六年に結ばれたりし樂しき一對の居を「フローレンス」に卜するや、女史は此處に以太利の窮民が自由のために叫べるを見て、直ちに同情の涙を流しぬ。而して一千八百四十八年の革命は實に女史をして「カサ、ギヂーの眺望」を草せしめたる原由なりき。されば此詩の如き、同情に富める女性が怒りの焰と、哀れみの涙よりなれるものたるに外ならず、元より金錢のために綴られたる美麗文字にあらず、又元より名譽のためにひねり出されたる難解高慢の劣文學にもあらざるなり。余の最も同情同感に堪へざるのもは女史が「小兒の泣聲」と題せる一篇なり。實に女史は一般詩人と異なりて、自家殊得の長所を有し、他人の心付かざる處より美はしき道德の敎戒を引出すの天才なりき。彼の「テニソン」の詩の高調なるは人の能く知るところなり、然れども女史の詩も亦決して其高調なることに於て「テニソン」の詩に下ること多からじ。深高なる感情の振動に至つては、余は或は「テニソン」の詩の女史の詩に勝らざるかを思ふものなり。一批評家は曰く「女史は此一點に於ては或は「カムベル」及び「テニソン」の上にあらん。元より多くの場合に於て、「カムベル」こそ斯の種の文學者が達し得べき最高點に達したれと云ふを得べきもの。」と女史已に高尙なる調を歌ひ、之の中に深遠なる情操を貫通せしむ、其抒情詩の人心に徹するが如きものある元より當然のことなり。已に述べたりし如く女子は希臘の古典を好みたりしと共に「テニソン」の詩を愛誦したりしが如し。其初年の作の「セーレー」の流を止めたるは、女史「セーレー」を學びしによるにはあらで、其古文學を好むの趣向を同ふせしによるものなるべし。女史の天才は二方面を有したり。一は抒情詩にして、他は戲曲なりとす。余は

已に前者に付て多少の記する處ありき。其後者に至りては或は餘りに多く記するの要なからん。女史は戯曲家として確に一地歩を占めし人なりしと雖ども、其抒情詩の大なるに比しては殆んど見るべきものなしと云ふも過大の言にはあらざるべし。「ステッドマン」の評して、古今東西の文學史中「サッホー」に次ひでの女詩人なりしと云ひしもの宜なりと云ふべし。

窓のむら竹

其の字生

蜀山にまれ、貝顔にまれ、所謂狂歌師なるものは、狂歌其もの〻、奇なるが如く、其人いづれも皆奇にして、性行人の意表に出て、恰も常規を以て、正すべからざるところのものあり。誠に一種特異の天敏、我れ彼等が身の上に於て是を見る。されば、其紀傳なるもの、いづれが讀んで興あらざる。

然り而して、窓のむら竹が傳記の如き、其數多き中の優なるもの、讀んで尤も興味あり、實に其日常の行ふところ、奇人として見るべく、畸人として見るべく、然かも亦、循勵の人として見るべきなり。

時を憤ほり、世を怒かり、白眼にして天地を睨し、青眼にして萬象に對し、或は罵り或は笑らひ、一種低調の高踏主義、我れは顔に振舞ひて、揚々得たり氣なるものども、彼等大抵皆然り、然してたま〳〵に然らざるは、凡骨凡眼、いふに足らず、取るに足らず、いはゆる齒の浮くが如き似而非風流、卑俗極まる俗物なり。

さるを、斯る中に立て、かれに偏せず、これに偏せず、悠々分に安んじて天を樂み、人を羨まず他を恨まず、思ひを狂體の詠に馳せ、衣食を己れが汗に求めし、窓のむら竹、彼れが如き、尤も傳ふべき人物なり。

狂歌師の歴史、此人一人あるがため、實に光彩の陸離

たるもの、ために其全躰を粧ふべきあり。

惜しいかな、斯るべきを其紀傳、誠に散亂して統を欠きたり。詠吟世に傳れるもの甚た少なし、故に其詳細のことは知るべからず、唯一片の零墨、或は二三の逸事逸話、これ等を其經として、これに我か想像を加へて緯となし、即ちそが小傳を僅かにものし、讀者の前にこれを展す。

庶幾くは、諸兄諸姉が、意を得ることの、わづかにあらんか。

●●●●窓のむら竹　文政それの年を以て、江戸の麻布に生れたり。姓は多田氏、名は敏包、通稱を千次郎といひ、號を菁莪堂といふ。

三歳の時、父を失なひ、七歳の時、母に別れ、たよりなき孤兒の、一商人がもとにたよりて、漸く人となるとを得たり。

生れ得て、いとゞ物にさとく、大ひに書を讀むことを好み、東に奔り、西と馳せ、いろ／＼とつとめかせぐの間、たゞ一寸の暇さへありても、小さなる草双紙、或は幼物語など、繙きてうたゝたのしみ、時によりては、商人に叱からるまでも、これに耽りぬ。

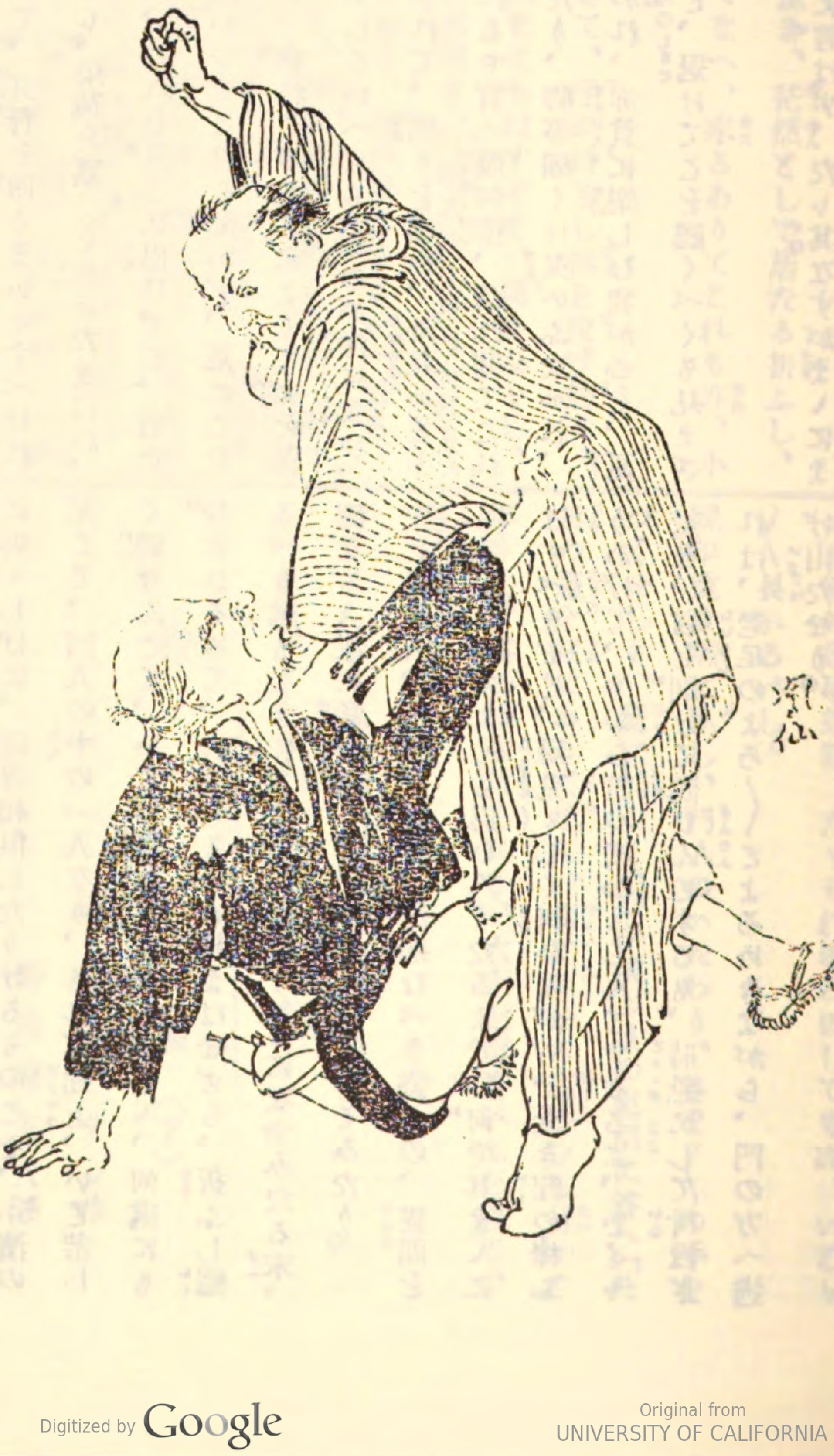
斯る性癖、年と共にいよ／＼深かく、様々の書を讀まんものと思ひなせども、身いとゞ貧しければ、其事叶はず、すなはち日々市に出でゝ、菜蔬の類を賣りあるき、其得たる處の利益、即ち一日の食を求めて、殘るものはことごとく、書を購ふの資となしけり。然して其身の衣は破れ、家は傾ふきて雨もるとも、更に意とすることのなかりき。されはまた、それに伴なふ妻なるものも、それに安んじて、露いさゝかの不平もいはず、なるべくは、そがことを助けんものとつとめたりき。

斯くの如くして、日ごと夜ごと、讀み得たるところ、學ひ得たるところ、おのづから積りつもりて其の才高

く、其名いよ〳〵著はれて、遠近のたれもかれも皆むら竹をかたり、傳たへ、各々菁莪堂をとり沙汰さるに到りたり。

されば、身分ある人、たつとき人など、彼我相ついて門に謁し、束脩をなして弟子となり、時々來りて講を聞き、或は歌の點を乞ふ。

されば、これ等の人々に、先生と尊はれ、師匠と敬はるも、依然其樣をあらためず、襤褸百結、見るにも堪えぬ姿をして、日々と菜蔬を擔ふて、各所に馳せ、少しも耻づる色とてなし。



門人のたれかれ、互ひに言ひ合はせて、これにせまり、我等たとひ如何にもして、其資を贈りまゐらすべければ、何卒〻〻市に出でゝ、菜蔬を鬻ぐを止めたまはれ、弟子門人の身としては、これを見るに忍びずと、言を盡して支ゆるも、未だかつてこれを聞かず、更にこを改むべくも見えざりき。我れこのことによりて命を保つ、其様まことにいやしといへども、おのが汗に食ひ、力に飲む、人に助けられて、驕りを極む、外見いとゞ華美やかなるに、優れるや實に幾何倍、我れ却てこれに驕り、心誠に悠〻たり、卿等願くは又いふなかれ、又其言を以て亂すなかれ、赤貧に樂しむ我が心を、更にさらに亂すなかれと、退けてこを聽くべくも見えざりき。

されば、いづれも遂に言はず、たゞ其なすがまゝにまかせたり。

或日のこととなりき、例の如く菜を擔いて、四つ谷邊に到りしが、遙かにむかふより來れる士人、行列まことに美〻しげに、從者相倶したりけるものこそ、小濱の某とて、門人の中の一人なり、されば途上、いと恭しく禮せんこと、いとゞ氣の毒に思ふがまゝ、何處にも身をひそめて、あはじものと見まはせども、折ふし隱るべき處もなきに、とやかくやとことになやみたる末、側なる人家に馳せ入りて、中庭の隅にひそみたり。

主じなる人、これを見て、汝惡むべき盜人の、晝間をも憚からで、よくも忍び入りたるよ、如何で其まゝになすべきぞと、聲荒〻しく叫ひながら、太き樫の棒ふりあげて、やおら打つてかゝらんとするに、いとゞ驚き、言を別けて認ひんとするも、時急にして叶はざれは、老足のよろ〳〵とよろめきながら、門の方へ逃げ出たせり。

逃げ出でし出合がしら、はたと小濱に行き合ひたりしかば、小濱はいとゞ恭〻しく、笠を脱し、腰をかゞめ、

先生何故に今は斯る處にと、行禮いたらさる處なければ、從者のいづれも左右に居ならび、各ひざまつひて禮をなす、かの男、追ひかけ來りてこの有様に、さて如何なればと大ひに驚き、茫然として居たる折ふし、又ゝ一士人の列をとゝなへ、來るありてこれも亦、小濱の如くに禮を行なふ。

いよ／＼ます／＼驚きて、手に持ちし棒を投げ捨て、さてこれは如何なる人にておはすぞと、問ひたゞし、初めて其の人の今世に名高き、狂歌ざれうたの大名人、窓のむら竹なることを知り、我れ眼ありといへども、高士を知るの明あるなく、誠に無禮を極めたり、願はくは重き罪、許したまはれと、地にひれふし、低頭平身あやまりわぶ、むら竹これを扶け起して、いたらぬ隈なくいたわりなぐさみ、事は遂に笑ひとなりけり。

それよりして、かの男、弟子となりてこれにつかへ遂に風流の秘をきはめて、むら竹の歿後衣鉢をつぎ、二世窓のむら竹とあがめらるに到りたり。これたゞ其性行の一斑のみ、もし書によりて漁り求め、そを一々にいふ時は逸事逸話、たゞそれのみにしても亦、いとゞ／＼長かるべし。

晩年重き病に臥し、門人のいたわり、さま／＼の手をつくせしも、更に効なく、松平侯よりの慰問に答へ『此君の恵を杖におきて見ん、病に臥せる窓のむら竹』と奉りし、其心根も仇となり、六十七歳といふを以て、遂に逝けり。

小説

首輪（下）

佛　モーパサン作
築地庵主人譯

夜會の日も到着し、夫婦とも官舍に出掛けました。此

夜妾は出來得る限りの盛裝をして。始めての仲間を驚かせました。寄り集つて居る總ての紳士方が。皆妾の方に眼を着け。妾の名前を聞て。紹介を求めぬものはなく。內閣の高等官も妾に舞踏を申込み。文部大臣さへも妾の事を話して居られたそうでした。

妾は澤山の紳士方と。醉ひ倒れん計りに舞踏しました。其夜の手柄と愉快さは生れてから始めての幸ひだと思ひました。妾は此面白さに何事も皆打忘れて。舞踏を仕舞つたのは。最早夜半も過ぎ午前三時頃でありました。

此間良人は待遠きを我慢して。次の間の椅子に凭れて。坐睡をして居ましたそうでしが音樂の聲が止んだのに眼を覺まし凱旋して立歸らんとする妾を目付けて、急ぎ足に側へ來て。自分の持て來た肩掛を妾の肩の上に着せて呉れました。併しソレは極く粗末なもので。何となく綺麗な舞踏衣裳とは釣合ひませんでした。ソレ故妾は他の婦人に見られまいと思つて。驅け出そうとしました。スルト後から良人が呼留めました

「待て。外へ出ると風を引くから。己れが往つて車を見付けて來てやらう

妾は之を耳にもかけず。急き階段を下りて往還に出ましたが。車を見付けることが出來ませんでした。遙か隔だつた處を通りて居る辻車を呼び留める爲に。堀端の寒風に晒され慓へながら歩きましたが。漸のことで破れかゝつた提燈を點けた怪しげな合乘車を見付けて之に乘り。また憐にも貧乏じみた自分等の家に歸りました。其時は最早鷄鳴に間もなかつた頃です

良人は午前九時迄には役所へ出頭せねばならぬ。身ですが。妾は緩々と一日休まれます。妾は良人が其衣服を脫いで居る間に。姿鏡の前に立て今一度綺麗な粉裝を見たいと思つて。肩掛を取ると。實にマー驚きました。……妾は其驚に思はず大聲を上げて叫びました。

「オヤ首輪が無い―

着物を脱いで居た良人も吃驚して叫びました

「どうしたんだ

妾は狂氣の如く猿眼になつて其處等あたりを捜しながら答へしました

「ヨ、芳野夫人の首輪をナ、なくしました

良人は立上り

「ナ、何、どうした。そんなことはあるまい

といつて妾の襟の周圍から袂や帶の邊まで。スツカリ捜して呉れましたが。ドウしても見當らなかつた

良「舞踏を仕舞つて歸る時確かにお前は着けて居たが

「御殿の衣裳部屋で觸つて見ました

良「道衢で無くしたら音がする筈だソレとも車の中か知ら

「多分ソーでしよう那方は何處の車だか御存知ですか

良「知らない。お前は知つてるか

「イーエ提燈にも氣が付きませんでした

夫妻共驚きの餘り暫くは無言で。唯茫然として居ましたが。良人は終にまた着物を着直し。「コレから歩いて往つて見當るかドウカ歸つた路を捜して見ようと。悄然と出て往きました

妾は夜會の衣裳を着た儘。勿論臥床に着く勇氣もなく。火もない冷かな一室に。何の考もなしに唯茫然と坐つて待て居ました

頓て七時頃になりて。良人は歸りて來ましたが。其顏は失望を以て青く染つて居ました。良人は再び出でゝ交番に行き。探明局に往き。新聞社に往き。懸賞を以て之を捜さんことを願ひ。少しにても手懸りのありそうな場所へは。ありとあらふる手を盡して悉く捜しました。

妾は此恐ろしき災難に逢ひ。心も心ならず神佛を念じて終日空く良人の吉左右を待つて居ました。けれども

總て水泡でした。良人は夕方になりて悄然と歸つて來ましたソシテ妾に云ひました

「ドーモ知れない。併し何時まで先方へ默つても居られないから。お前は芳野夫人の處へ手紙を遣れ。ソシテ拜借の首輪は蝶番か外づれましたから修繕にやりましたと書け。ソーすればまた暫時詮議の餘日が出來るから。

妾は良人の指圖の通り。手紙を送りました。其後一週間も空く過ぎ望は全く絶えました。我良人は心配の爲に急に五つ六つ年を取て見えました。アー此首輪はドーしても返さねばならず。愈知れぬとなれば代りを見付けて辨償せねば義理がすまない。ソレ故夫妻は翌日になりて首輪の箱を攜へ。其商標を目的に元と之を賣つた玉屋を尋ねました。

店舖の番頭が帳面を調べて呉れましたが見當らない。多分箱丈け直して指上げたのでしようと冷淡に答へました

ソレから心配でならないから。方々を搜し歩き。遂に銀坐の天賞堂に往つて。丁度同じ樣な金剛石のあるのを見付けました。ソレが五千圓の品であるけれども。四千五百圓迄には負けるといひました。

其處で夫妻は一週間人に賣らないようにと賴み。又二ケ月以内ならば一割引にて買戻すといふ約定を極めて立歸りました心の内にはまだ眞物が見付かるだらろうと空賴をして居りました

我良人は如何樣の事ありとも用ひまいと大切に仕舞込んで置いた。親讓りの公債證書が千圓自分の住まつて居る家。屋敷が五百圓程都合千五百圓は財産として持つて居ます。其外は他より出來る丈の融通をして借入れる決心をしました。ソレから日々驅け廻りまして或人から百圓。或人から貳百圓。其處で五千圓。彼處で三千圓と方々借り集め、或は借用證文を書き。或は約

束手形とし。高利貸に頼み。質屋に走り。大抵の金貸と談判をして。漸の事で四千五百圓を纒めました夫妻は全く一生涯を之が爲に捧げ。何の考も無く無闇に記名調印をして。身に餘る借金を負ひ。之から後どんな困難辛苦をせねばならぬか。凡そ肉躰に受くべき總ての貧苦を心に承知しながら。四千五百圓を投じて新しい首輪を手に入れました。妾は之を元の箱に收めて芳野夫人の許に携へ往き。禮をいつて之を返す其苦しさ。ケレども先方は此間の苦心は更に之を知らず

「コチラにも入用の品だから早く返して下さればよかつたに

と極めて冷淡に受けました。けれどもマー仕合の事には其箱を開いて改めなかつたのがまだしもでした。若し身代りの品だと知つたならば私を何といつたでせようか

ソレから妾は妄想の夢も破れ。次第々々に貧の苦しさを深く心に感じ。忽ち勇氣を惹起しました。アノ恐ろしい借金は是非共拂はなければならぬ。イヤ是非拂つて見せると。今迄にない女丈夫の魂を出して。ソレから家政の改革を始めました。第一に下女に暇を遣り。今迄の住居を引き拂つて九尺貳間の長屋棲居に移りました。

其後といふものは。家事萬端一身に引受け。庖厨はいふに及ばず襯衣下帶の洗濯から。上下の拂掃除。はては味噌濾下げて八百屋豆腐屋の買物に。一厘一毛の掛合をなす迄。裏店の賤の女同樣。ありとあらゆる艱難を嘗め。かてゝ加へて毎月借金の言譯に一寸。逃れの心にもなき虚言を吐き。八釜敷談判に逢ひては。書換または延期と。其日其日を延ばし。生きながら焦熱地獄の責苦に。憂き歳月を送りました

良人もまた內職に寫字筆耕を力め。夜は更闌くる迄眠りもやらす。唯金錢の奴隷となりて。齷齪と稼きまし

た
此生活は十年の間續きましたが。夫妻共稼きの力は實に恐しいもので此十年の間に悉皆借金を返し。然かも高歩重利の割合を以て。總べて返濟の義務を果しました

或る時妾は洗湯の姿鏡に自分の容貌を寫し。昔に變る今の有様に。覺えず涙を落しました。見れば髪の毛は塵埃に汚れ。手は赤く。足は肥りて全く貧家の婦人となつて仕舞ひました。

また或る時妾は良人の役所に出勤しました。留守中。窓の傍に坐りて今は夢の跡となつたアノ樂く愉快であつた舞蹈の夕。其美しさを人々に羨まれた娘盛りのことを思ひ出しましね。アノ時若し妾が首輪を失さなかつたなら、今はどうしてゐるでしょうか人間萬事塞翁馬といふことがあるが實に浮世は不思議のものであると徐ろになへて居りました。

其翌日丁度日曜日ではあるし一週間の骨休めの爲に妾は銀坐へ散歩に出掛ました。其時向ふから愛らしい小供を連れたまだ年若き婦人を見受けましたが。近寄つて見ると忘れもせぬ十年以前の親友。芳野夫人でありました。此時妾はなつかしさの餘り。我を忘れて近つき芳野さんしばくらと聲をかけました。スルト夫人は斯かる見苦しき婦人に知己はないといふ顔付をして

夫人「妾はお前を知りませんよ間違ではわりませんか

「イーエ間違ひませせん妾は大井花子ですよ

夫人は妾の名を聞てぎよつとせる程驚きました

「アーそうだ。可愛さうだ。花子さんマー大層變つたではありませんか

「ハー妾は夫人と別れてから。ホントにマーいふにはいれぬ苦勞をしました。お察し下さい之もみんな夫人の爲ですよ

夫人「ソレはまたどうして。妾はチットも知らないよ

「夫人はアノ大臣の夜會の時に貸して下すつた金剛石の首輪のことを覺へてお出でてすか

夫人「アーよく覺へて居ます

「妾はあれを失くしました

夫人「ソレでもお前持て來て返したではありませんか

「妾は丁度それと似寄なのを買て返したのです。ソレから十年といふ永い月日の間、之を拂ひ返す爲に、マーどれ位苦勞したか知れません。貧乏人の妾の爲には中々容易なことではありませんでした。ケレどもモー此苦勞も全く濟みましたから妾は喜んて居ます

夫人「ソレでは妾の首輪の代りに金剛石のを買つて返したといふのですか

「シテ夫人はまだあれにお氣が付かないのですか。大變好く似て居たもんですから。と妾は自分ながら旨く瞞着かしたことを喜び。笑ひながら答へましたスルト芳野夫人は大變顏色を變へ。サモ氣の毒さうな風にて涙を流しながら妾の兩手をシッカりと握り

夫人「アーすまなかつた。花子さんアノ首輪は贋物なんだ。貴くても百圓位の品でした　(完)



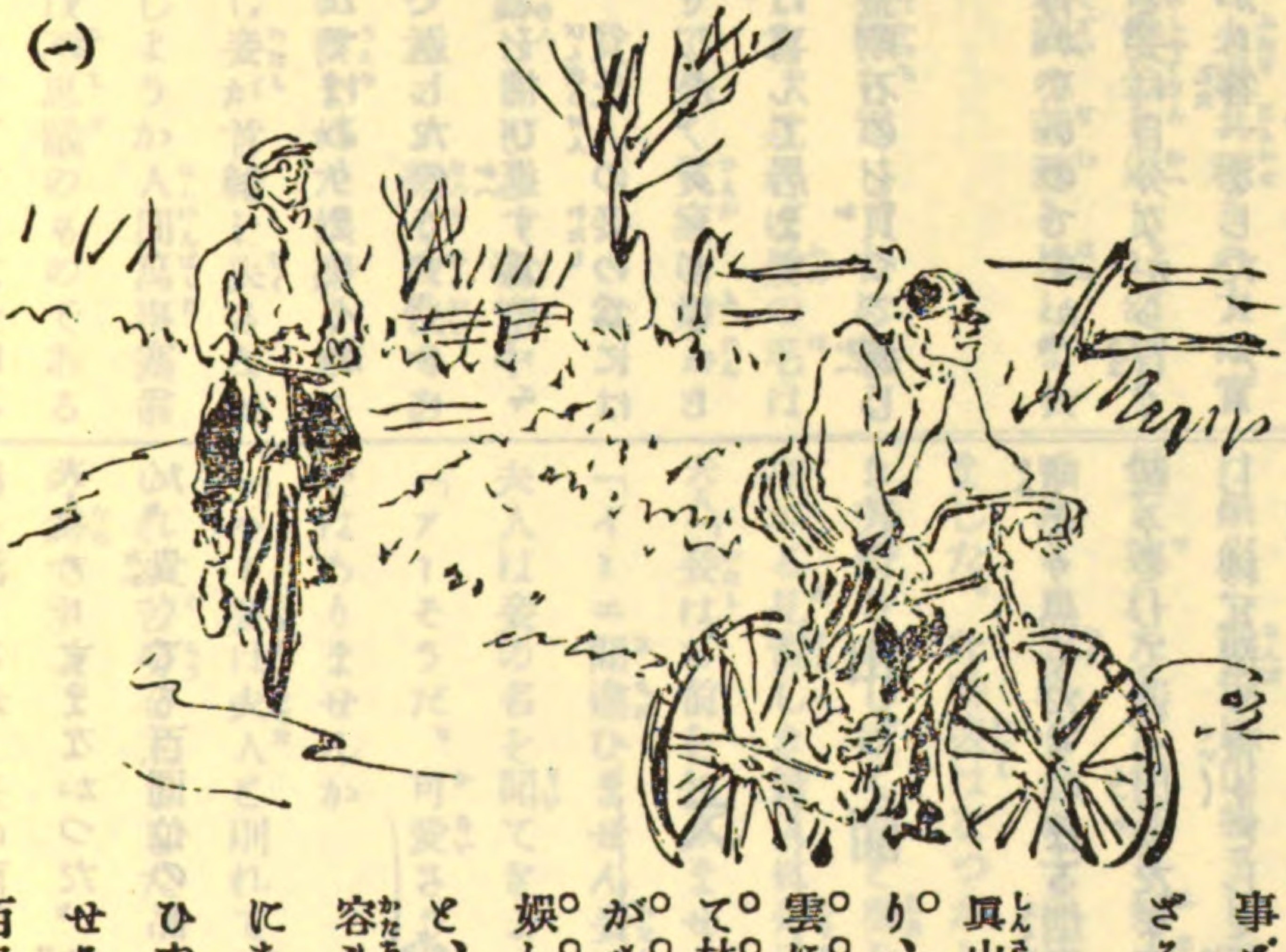
文藝

田園雜興(一)

不二行者

暗より黑くたちのぼる烟突の烟を、見馴れし眼には、暖々として遠く閑にたなびく茅舍の炊烟珍らかなるべし。練瓦造の齊々として瓦甍の列びたる、鐵路を馬車の輾りたる都大路を往來すなる脚には、林の陰に曲り

小川の隈に折れ、彼方此方に立つ家居を縫いゆく樵路衢往ゆかしからむ。瀛笛の響轟々たる馬車人車の轣轆たる曇玻璨の窓の裡より三絃唱歌のなまめきたる、金殿玉樓の宴の賑はしきより、井戸端會議の話說の喧囂しき等、終日終夜動響となつて、聾いんばかりにたこのあたりし鼓膜に、背戸の水車の音、野面の禽の囀哢、牟々たる家犢の聲、喔々たる雞の聲、賤が家に機織る梭の聲桑茶摘芻蕘の歌唄等、靜に從容たる天地に折々けうとく聞かんは、甚と與ありて、樂しかるべき事ならむ。さらば一刻千金とし言へる此忙がはしき世に、宛然春の日に庇出したらむ如き田園の事どもを語らむも強ちにはあらざるべし。


（一）

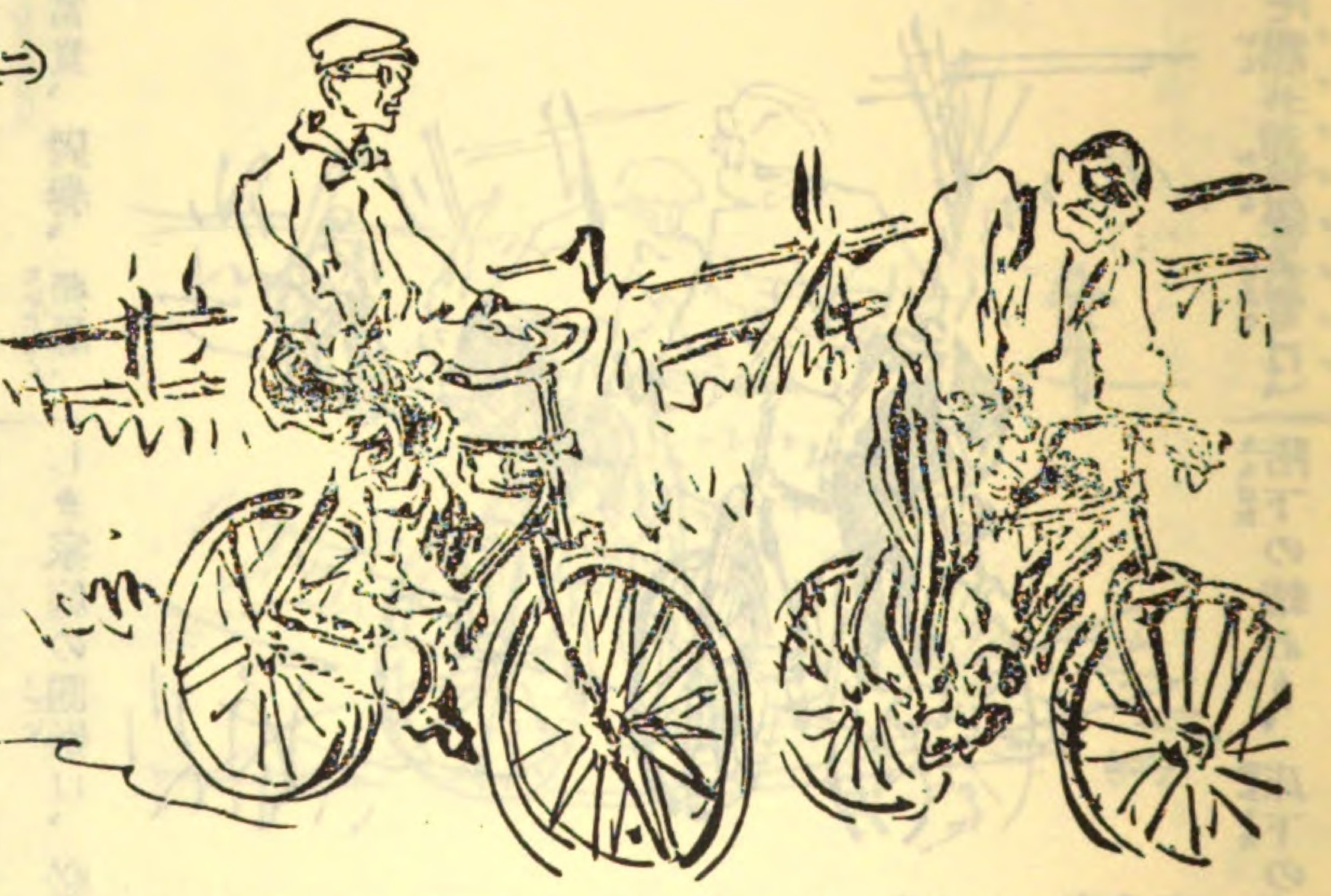
彼の廬

眞山民の詩に『泉に獻べる聲あり、我を呼びて澗谷に來らしむ、雲には喜べる容あり、我を招きて林麓に入らしむ。泉は以て我が心を洗ひ、雲は以て吾が目を娯します。』と、彼の廬はそれ泉の聲も雲の容も、皆親しましく、富士の麓にあり。老いたる幹に蘿葛の纒ひたる松、直なる柯高く天を指せる梧桐、檜、冬青樹、梅、櫻、百日紅、木蓮、茶梅、李、杏、

梨、栗、柿、大仙木、樫、樟樹、巴丹杏、椿、落葉松、梛、棗、合歡木、ユーカリ樹、楓、銀杏、林檎、桃、仙動木、南天、柚、蜜柑、橘、薔薇、桒茰、海棠、柘榴、木瓜、茶、榊、大明竹、枇杷、梔、山吹、躑躅、楊梅、籐、柳、欅、黒檀、棠檀、柊、杜松、——是等の樹立、春夏は翁欝として翠を疊み綠を凝らし、秋冬は枯痩して山月を懸け寒鴉を留むるそが裡に、膝を容るべき蝸廬一軒。

背戸を流るゝ小川あり、細々として寂寞を語る。籬を隔てゝ森あり、幽禽の聲を聽くべし。森を隔てゝ田園萬頃、富士の高嶺を麓路かけて仰ぎ視るべし。門に訪ふ人稀なり、蜘蛛の絲かけわたして、主を塵の世より閉ぢ籠めむずるが如し。三面の青山笑を含める一面の窓に、田子の浦の眺望あり、滄溟萬里、碧波縹緲として、海氣茲許に來らむかと覺ゆ。家宅の中數畝の圃あり、豌豆を蒔くべく、胡蘿蔔を蒔くべく、蕪、桒、午蒡、茄子、胡瓜、葱、薑を好むまゝに培ふべし。芍藥、長命菊、金線花、鷺草、月見草、菖蒲、はた水仙を植えたり。自然の榮華とも言ふべきもの大概具はれり。森の彼方、一町許にして寺あり、伽藍古色を帶びて堂宇

(二)



ものさびたり。觀經の聲木魚の音寂寥を添ゆるの邊、彼が祖父の石碑は立てり。功名、富貴、毀譽、榮辱、禍福、悲喜、哀歡、是等を曾て一旦心に身に擔ひたりし者は、盡くその寺の後邊に、高低參差せる亂塔の下、苔と共に休めり。かれの祖宗も眠れり、かれの叔姪も眠れり、はたかれの父も苔未だ蒸せず雨いまだ錆びざる石底に眠れり。今を昔に苔蘚空しく墓上の名を埋め、雨徒に石頭の字を銹するの處に長へに不朽不滅なるべき崇嚴なる天の星辰の眼、月の面に瞰下られつゝ、羈絆無き永眠の床に、安らげくこそ憩へ。彼等人皆は、再びまた家庭なる樂しき團欒に入り難きなり。石庭の

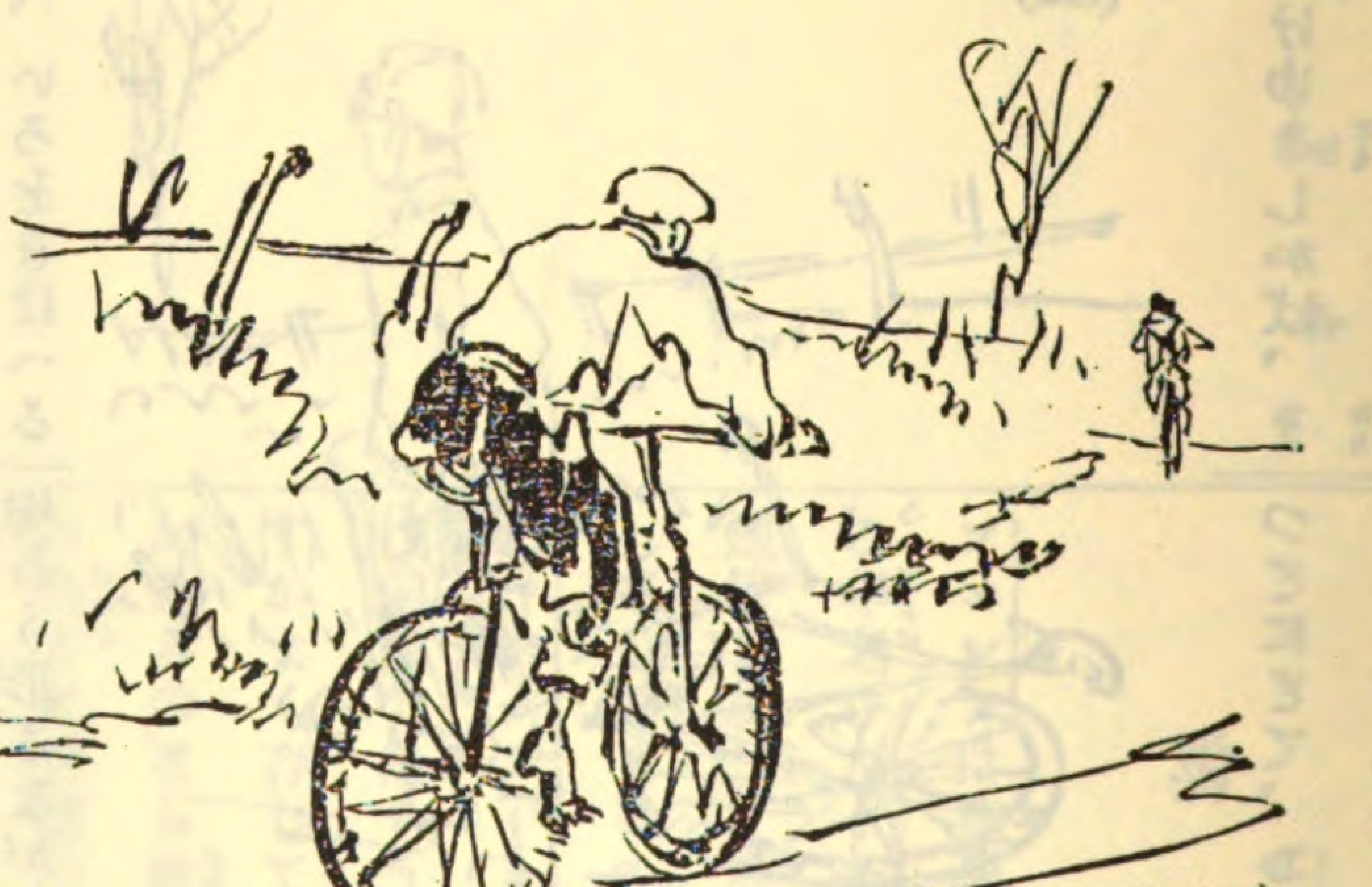


眠長には覺めざる夢を思はゞ、醒め居る世に、樂しましき家庭の團欒は、必ず有らまほしき事なるべし。

彼の家庭眷屬

文好める母あり、甚五郎ともアンゼロとも成らむと思ふ弟あり、針の手忙はしき妹あり。飼猫にとらあり。犬にぶちあり。雛の群あり。老僕ありき。小童ありき。老媼ありき。友あり、髮白く皺深く浮世の涙を顏にたゝめる翁なり。梢に來啼く鶯なり、青雀なり、畫眉鳥なり、鶺眼児なりはた鷄なり。花に來る蜂蝶あり、水に來る蜻蜓あり。階下の蟻あり、床下の蟇あり。皆伴侶とすべし皆家庭の眷屬とすべし。

人ありてかれに何の樂ありて片山里に棲むぞと問ふ。かれ唯笑みて家庭の樂しきを説く。「桃花流水杳然として去る、別に天地の人間に非るものあり」といひけん李白の世を外なる樂にあらず、「一期の樂をうたゝ寢の枕の上にきはめ、生涯の望みを折々の美景にのこす」といひけん長明の如き孤獨の樂には非ず。田園家庭の樂は、親しく心おき無き眷屬氏族が團欒し往來して、もて自然の山水風物を語り、花鳥月露に親むところに存するなり。



(四)

観梅

山本洗足子

ひと日机に向ひて文などよめる折しもおとなふ聲あるから、立ちいでゝみれば、親しき學の友なり、ほゝゑみて、いふやう、はるの長雨もけふはれそめて空のけしきいとのどけし、心もとみに、はるめきぬれば、いづかたか、そゞろありきして綻びそめし梅の花見ばやと思へり、君はいかにといふ、それこそいとよけれとて文とりをさめ、いざともない出づ、北のかたにむかひてやゝ一里餘り行きぬとおぼしきほどにやがて北野につきぬ大きなる、みやしろに

て、こは天満宮なれど、いとたふとみ前に、ぬかづきぬ、さてうしろにめぐれば、うゑつらねたる梅の花はやさき匂ひて、しろきも、あかきも、いろをきほへるさまたとへんにものなし、たかきいやしき老いたるも若きも、めでつとへるもの木の下になんみちける、あるは花のかげにまとひして、わりこなどひらき、あるは梅の枝をりかざしてまひ、あるはたゞひとり、ひさごをかたふけて呑てのゝちは那と口すさめるなど、いとおもしろし友のいざなふまゝに北の方のほそき道をもとめて、木立ち深き間を分けゆきしかば、まばらに垣しわたして片折戸のわらやあり友につれて立入れば、あるじにやあらん六十ばかりにて、清げなる翁立いでゝよくこそきまされとて庭の方にみちびきつゝ茶などすゝむ、此所にもいと、うるびたる一もとの梅あり形さながら、ふしたる龍のやうにて南の枝々は花さきみだれ一朶の雲かとあやしまる折しも鶯の枝をつたひつゝ若やかに鳴いてたるは天つ少女のうたふかと、うたがはる風まづかにふきくれば清き香をりおそひきて心は、いとぞときめきぬ、打よりて、ものがたりするほどに時もいとうつりぬれば、いざかへらんとて立ちいづるに翁は梅の一枝手折りて、けふのつとにとて、おこす、やがて立かへりて机のほとりにさして打見ればなほ花の下にて翁と物語する心地なんする。

（五）



春の句　はせを

鶯や柳のうしろ藪のまへ

うくひすや餅にふんする椽のさき

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

山里は萬歳おそし梅の花

かげらふの我肩にたつ紙衣かな

丈六にかげらふ高し石の上

春風やきせるくはへて船頭殿

春風や人擊うつる三笠山

八九間空て雨ふる柳かな

吹たひに蝶の居直る柳かな

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

古寺の桃に米ふむ男かな

談叢

勇しき孝子（六）

松ヶ枝女史

フェレブは見廻しましたが唯も他に人はなく唯だ一人の年老ひたトルコ人が部屋の片隅に腰掛けて獨り靜に煙管を弄して居るのみでした彼れは丁寧に老人に會釋して自分もその傍に坐を取り胸の鼓動を抑へつゝ「若しマスタフ、コデセと云ふ商人を御存じですか又住居は何處でありませうか」と尋ねました「マスタフ、コデセですかよく存じて居りますが彼は貪慾な犬だから何か用があるのなら欺されぬやうに用心なさい住居はあれあの向方に看樓の見えて居るのが彼の家です」と親切に敎へられてフェレブは非常に喜び馳せてその家に至りました折しも一人の男が庭を掃除して居るのを見もし

主人は在宅かと尋ねました「主人は留守ですが明日か明後日は歸る筈です」と云つたから「それじや又參りますがもしこの家に十一年か十二年も昔にカンデァから擄れて來た二人のギリシャ人の奴隷が居りすまいか」と問ひました「内の主人は澤山の奴隷を使ふて居るからどうしてどれがギリシャ人か分らない」、「どうぞ尋ねて見て下さいますまいか生きて居るといふことが分るなら實にうれしいから」「犬のことなど尋ねて居る隙は持たない、早く歸つてくれ、主人の居る時又來なさい」、フェレブは切りに賴みましたが無益でした、實に悲しくなりましたからあの知事から添書を貰ふて來たクラ、ベーの處を尋ねやうと決定して道々人に問ひますると皆頭を掉つて「クラ、ベーなどいふ人はこの市には居らぬ」と申します、猶も尋ねますると一人の答辭には「クラ、ベーは丁度一年前に死去して外にその名の人はこの市にない」と申ましたからフェレブの心は誠に張り裂くるほどに思はれまして凋々と靜かに驛舍に歸り薄暗き隅の方に行つて泣いて居ました、老トルコは矢張り煙草を吸ふて腰掛けて居りましたがフェレブが歸つて泣て居るのを見てその側に進み寄りました「何が悲しいことがあるのですか何も恐るゝに及ばないから私に語



（六）

りなさい」と誠に親切に申されましたからフェレブも否み兼ねて泣きながら過去の歴史と今バグダドに來た目的とを語りました老人は默思して聞て居りましたがやゝあつて「心配せずに居なさい、あなたの兩親を解放して上げると慥かに約束は出來ないが及ぶ限り試みましやう、落膽しないでマスタフが歸るまでお待ちなさい私は富貴ではないが私の主人は裕富だから主人に話してどうかして上げやう」そう言ひつゝ煙管の灰を叩いて驛舍を去りました、彼は信じるに足りましやうか然し誠に親切に


(七)

眞面目に扶助を約束して去りました

再會

五六日經過しましたがフェレブの身に何の變化も起りません毎日マフタフの家に參つて歸つたかと尋ねても毎日「未だ」といふ同じ返答のみ得て歸りましたハッサン即ちかの親切な老トルコは毎日フェレブを驛舍に見舞ふて慰めて遣りました、丁度一週間計り經ちますとマスタフが家に歸つたことが分りましたからフェレブは喜んで例の老トルコの來るを俟つて居りました程なく入つて來ましたから矢庭に

叫んで「マスタフは歸りました」と申ますると老トルコも喜んで「私の主人も先日來留守でしたが丁度今日歸りましたから好都合です、もしマスタフが無慈悲なことを申たら又他に手段もあるから先づ兎に角行つて何を云ふか見ましやう」フェレブは言の終るも俟たす直ぐに從つて間もなく共にマスタフの門戸に至りましたマスタフは非常に貪慾狡猾な男だから充分用心しなければ折角の苦心も水泡となつてしまふ故寧ろ私獨り入つて談じた方がよからうとハッサンは申しましたがフェレブは必ず誓つ



(八)

て怪しい素振を見せないからどうぞ一所に携れて入つてくれと頼むのでさらばと二人入りました、マスタフの下僕等はハッサンの威嚴ある風采に畏れて故障云はすに主人の部屋に案内しました

マスタフは親しそうに二人に迎へて椅子よ煙管よ「コフヒー」よともてなして「何ぞ用で」と尋ねかけましたハッサンは態々と落ち着き拂つて「今日は實に並ならぬ用事で推參しましたがそれは斯樣の次第です、私の主人が今度の戰爭に勝利を得たので祝勝の為めにキリスト教徒の奴隸

を五六人解放したと云ふことですが貴下の許にも居るそうだからそれを尋ねに伺ひました如何でしやう解放なさるお見込みはありますまいか」

「祝勝の爲めキリスト教徒の奴隷を解放したいとは、貴君の主公も少し變物だが何、代價さへ下さるなら相談にも乘らう」

「キリスト教徒は幾人お使ひですか」

「たゞ二人ですが誠によい奴隷です」フェッブは堪え兼ねて

「どうぞ名を聞えて下さいそうして何處から來たのか早く尋ねて下さい」といふのでハッサン

(九)



は低き聲で「靜かにして居らぬと何もかも駄目になつてしまふよ」と囁やきましたマスタフはフェレブの樣子に注目して「そのお伴れは何か望むのか」と尋ねました「え、何でもありません、貴下の奴隷は何處からお求めになりました若いですか或は老人ですか、」「十一二年前カンデアから八百圓で買つて來たギリシヤ人で夫婦ものです名はメサロスとヘレナと云ひます」

思はず低き叫びはフェレブの口を洩れました兩親は存命で而かも今自分は同じ屋根の下にあるのですフェレブの胸は實に高波

打つて居りましたもしハッサンが眼を以て制しなかつたならその感情を露はしたであらう

マスタフは又疑つて「その青年は誰です」と問ひました「あゝ近頃カンデアから來たもので行儀作法も知らないのです、それはさうと十一二年も使役した奴隷は今日同格の價値はありますまい」

どうして／＼こんなよい奴隷を見たことはありません未だ年は若し健康で忠勤する、先づ千圓の價は捨てゝもあります」

「はゝなか／＼きついことを言はれますなあ、私の主人は六百圓迄なら拂ふかも知れませんがそれより一分も出せません」

「それじや困ります、千圓でなくちや上げられませんが先づさきに見なすたがよからう」



「いえもう充分です賣つてもらわなくとも宜しいからさ早く歸ろふ」とフェレブを引き立てゝ去ろうとしましたマスタフは好機會を失ふてはと心配して「まあちつと俟つてくれこれ早くあの二人を携れて來い」「否見るに及びません私の用は濟みました六百圓より一分も出すこと出來ません」と強て立ち去んとするを引き止めてそれじや六百圓で上げやう」と申ました

「宜ろしい約束しました何れ明日」と云ふてフェレブ諸共立去ふとする途端二人の男女が入り來つて低くマスタフの前に跪きましたマスタフはハッサンを呼びとめて「これが今申た奴隷です」と云はれた時はハッサンは暫し心を失つたやうな感じがして振り向けば已に遅いフェレブは早や已に兩親の腕に抱き付いて居りました何もかも忘れてしまつて「御兩親」と呼びつ走せ寄つたのでしたマスタフは笑つて「はゝ矢張り私が巧であつた、最初の價でなくちや賣りません」「そんなら、貴下は何も得られぬでしやうこの子は貧窮ですから、フェレブ早くお出なさいもう此處に何も用はない」とハッサンに申されても今はいつかな聞きません、六百圓を拂ふて私が此處に止つて代りに奴隷になりますから御兩親早く國にお歸りなさい、カンデァの知事が御世話なさいます」と云ふて動く氣色はムいません「よろしいそれぢやそこに居りなさい、お前が居らずと用は濟むから、そのうち便をしやう」と云ひ殘してハッサンは去りました

知事の令息

翌日ハッサンは朝早く己が主人の許に參りました、主人は心地宜氣に迎へて「今日は何んな話があるのか」と尋ねました「誠に珍らしい話でムいます」「そうか語つて聞かして呉れ」と云はるゝ儘にフェレブから聞き得た悉皆を物語りました、主人は聞き終つて「それは我の友人のフェレブ、メサロスだ、早く行つて逢ひたかつたから携れて行つて呉れ」とハッサンは命に從ひましたが、然しマスタフは狡猾だから用心しなければならぬ故一切は私に任かして下さいと願ふて主人にその立派な衣服の上に常人の着る衣をきせかけさせて誰人か分らぬやうにして伴れ立つて行きました、

ハッサンの入り來つたのを見てマスタフは非常に怒つて「何用で人の家に入つて來ました用はないから早く

歸つて呉れ」など丶途方もないこと計り申します、ハッサンは落ち着いて「まづ先きに私の友人のフェレブとその兩親のことを談じやうそれさへ濟めば決してお邪魔は致しません」「何です、あなたの友人のフェレブですか、そんなものは知りません何の故わつて貴下は私の家の奴隷に干渉なさるのです、早く立ち退きなさい」と大聲に怒鳴りましたハッサンは斯くとは兼て察しましたが態と驚た風をして「御存じないと仰せですかそれではフェレブ、メサロスが昨日この家に入ッたのを僞りと仰せなさるのですねい、して又私も昨日共に來てギリシヤ人の奴隷を解放する約束したことを否みなさるのですか」、「さうです否みます、斷じてそんなことは知りません」「あゝ然うですかマスタッ君、誘拐はこの國で重い刑に處せらるゝを御存じですか知事に訴ても宜いですか」「訴へたいなら勝手になさい知事は私の友人です、あなたの顔は二度と見度くはありません早く歸るがいゝ」と荒々しく云ひ放ちましたハッサンは「充分だ」と申ながら今まで無言で後方に起ッて居ッた自分の主人に振り向ひて「惡漢は此奴です、もう逃ることは出來ません」と申ますとアシユメットは直ちに今まで被ッて居ッた衣を脱げばまばゆき計りに立派な扮裝が顯はれましたマスタフは自分の前に長官の立ち居るのを見て試に驚き直ちにその足下に平伏して「從前の罪科の爲め充分の償をしますから何卒この事は知事に上申ないやうと切りに乞ひましたアシユメットは實に怒りに堪えませんでしたがハッサンが何か耳に囁やいたので遽かに笑ひながら「憫然な男だ起きなさい一つの條件付きで宥るして遣らう外でもないがお前の身代の過半をフェレブに與えなさい」マスタフはこの要求に殆んど狂せん計りに悲しみました然し與えねば知事に上申される上申されては命がない故泣き〳〵フェレブに一千兩を與ふることゝ致しました、

「金と奴隷と共に此の場に持つて來い逃げてはならない知事の眼は何處までも屆きますから」と長官に云はれてマスタフは詮方なくメサロス夫婦とフェレプと金子とを携へて參りました、

フェレプはアシユメットを見るや直に飛び付いて別後の情を洩らしましたアシユメットも懇ろに「今日からあなたは自由な身とはなる計りでない富裕な身となるのです、凡て皆永年の間忍耐不抜の精神で兩親を思ふた報酬です、」

マスタフの家より去つて一同長官アシユメットの家に數日客となつて樂しき日を送り遂に再びカンデアに歸りました永年の勞働に疲れ果てたるメサロス夫婦も今この立派な品高き青年に「父さん」「母さん」と神聖なる名を呼ばるゝのを思ふては誠にいま一度あの苦難の勞働を重ねても悔みやはしないと思ふたのでムいましやう、夕の飯の畢つた後夜毎に母はフェレプを呼んで別後の萬事を操り返し〳〵語らしてムいましやう、カンデアにて昔し所有した地所を買ひ戻して再び美くしい家屋を構へメカエル、サントを呼び寄せて家内の長者と崇め愛し再び幸福なる日月を拜するに至りました、困苦の後の快樂は又一段の趣味を有して居りまする要するに人間は凡て一度苦しまねばなりません唯だその苦難を忍耐してこそ誠の幸福を後日に得らるのです、

（完）

菓子の話

金龍子

◎京坂の地方、いづれの所に到るといふも、最中といふ菓子更らになし、故に京坂の地方より、あらたに上京なしたる人の、最中を懷中善哉と誤まること、屢々ありて珍らしからず。

◎懷中善哉は、東京の菓子屋にもあり、其格好誠によ

く最中に似たり、湯を注げば速成の汁粉、一寸面白きものなり、製法も亦最中によく似たり。

◎東京の蕎麥饅頭、京坂の地方にありては、これを常湯といふ。

◎中華饅頭と、すはまとは、京坂の地方にありて、東京及び東京の附近にはすべてなし。いづれも上等の物にあらず。中華饅頭は、大坂に多く、すはまは京都に多し。

◎京坂の地方、殊に京都に於て多し、菓子屋より、茶箱といふものを出たす、三十錢位のものなり。そは即ち讀んで字の如く、茶箱なり、細長き箱内を三段に仕切り、上の棚には、羊羹或は餅菓子、蒸菓子などのものを入れたる小さき菓子鉢を置き、中の棚には、いろいろと色美しき剝菓子を盛りたる皿、其皿の下に幅紗を敷き、傍らに薄茶を少し入れたる棗と、茶匕を置き、下には樂燒の薄茶々碗、たゞ一個入れたるもなり、又は渡沸かしと共に入れたるもあり、來客の時など、一寸氣取りたるものにして、然かも亦た便利なるものなり。

◎東京の源氏豆、京都の人は蓬萊豆といひ、大坂の人は、東京と等しく源氏豆といふ。

◎金米糖の形頗る大なるあり、泰平糖といふ。大抵の人、等しく金米糖と呼びなせども實に然らず、誤ちなり、京坂にも、東京に等しく多くあり。

◎東京の甘納豆、京坂の菓子屋、いづれの所もこれを製せず。金時或は小倉といふもの、趣き漸々甘納豆に似たるあり、これは京坂の地にのみありて、東京に於ては殆んどなし。

◎京坂の人、餅菓子といふことを、更にいはず、鶯餅も、蕎麥饅頭も、しぐれも、鶴の巣籠も、共にともに併せ呼んで、一樣に蒸菓子といふ。

◎羊羹に、煉羊羹と、蒸羊羹との二種あり、煉羊羹は、

普通の羊羹にして、蒸羊羹は、米の粉と交へ煉りたる羊羹なり、故に其色、小しく薄く、味はひて亦、いとゝ淡泊なり、京坂の人、これをウイロといふ、されどウイロと蒸羊羹とは其實別なり。羊羹の中に、小豆の粒、形のまゝに殘れるものあり、東京にもあり、京坂にもあり、然して兩地いづれも共に等しく、これを田舍羊羹といふ、猶此外に、丁稚羊羹といふもあり、名は實を顯はして品惡しく、よき人の前に出すべきものにあらず、寧ろ駄菓子の部に入るべきなり。

◎東京の鹿の子餅、京坂の人は、小倉饅頭といふ、牛皮饅頭、これを千歳餅といひ、鹽釜を白雪糖といひ、開化饅頭を、南京饅頭といふ、粟の水飴を乳ギヤウセンといふ、猶また街上に賣る處、燒團子を、みたらしといひ、あんころ餅を砂糖餅といひ、大福をおやきといふなど、外にも甚だ多けれども、今は一々にこれを記臆せず。

◎ぜんざいとは、小豆のあんを溶かせる汁に、米の餅を入れたるものにして、汁粉とは同じくあんの汁の中へ、米の粉にもあれ、小麥粉にもあれ、すべて粉にて造りたるもの、即ち一種の團子を入れたるもの、これ京坂に於ける汁粉とぜんざいとの區別なり。又東京の汁粉屋に於て、雜煮と普通にいひなすもの、京坂の地に於ては、スマシといふ、序にいふ、東京のきみ、京坂に於てはきみといはず、實際はベラ、といへども、素人は知らず、京坂のきみとは、東京のもろこしなり、故にそのきみ團子、或はきみの餅といふもの、東京のもろこし團子なれば、初めて京東に上りしものも、或は初めて京坂に行きし人も、共に一樣の不思議を懷く、つまらなきことにしなれども、これ又兩地に於ける相違の一つなり。

◎鹽煎餅といふもの、京坂の地方には殆んどなし、かき餅は到る處に多く鬻ぎて、鹽煎餅の如く用ひらる、

小料理屋にて、通しものにかきもち又はあられを出す處さへあり。

◎まるこ屋、或は蕎麥屋の行燈に、御膳と書くこと京坂にありてはなきことなり。

◎正月に食ふ餅、熨斗餅を四角に切ること、これ東京の風にして、京坂地方は皆、一升を四五十位、小さく取りてこれを丸るめ、お供の如くにしてこれを食ふ。

◎五月の節句、柏餅の外に、粽といふもの、京坂の地に於て多く製す、まことにまづきものなり。

◎東京にはすべて、餅草子、或は蒸菓子、尤も大く行はれ、京坂殊に京都に於て、干草子、割合に多く行はる、これ或は久しきに堪えて腐らずといふ一種の經濟主義より割出したるものなるべし、實の人情相違、皺にさゝやかなる所に於てもあるもなり。

群書解題

枕の草紙

欲東老人

日本文學の大寶珠、徑尺の夜光として世に重んせらる、紫式部が源氏物語と、兩々相對して更らに劣らず、かれ以て櫻の艶にたとふべくんば、是亦以て梅の粹になそらふべき、隨筆雜纂の最上位、枕の草紙といふなるは、清少納言が著はすところ、源氏物語と諸共に、また王朝の產物なり。

清少納言、史家の時に清女といふ、清原肥後守元輔が女なり。幼き頃より英才試に人にすぐれ、父元輔をはじめ、多くの人々、日ごと行きかふいづれもを、大ひに驚かしめしといふ。

年やゝたけにし後は、一條天皇のきさいの宮、定子と

申し上ぐる方に仕かへ、上意甚はた覺へ芽出度、よろづ御心に叶ひ、更に其ほとよりはなしたまはざりしとぞ。

其頃才女の譽高き、紫式部と名を等くし、和歌の莚に、あるは又、花月の御遊などによりて、其名宮の內外に響き、月卿雲客の其間に、うたゝ重きをなせりしとぞ。

烱眼、さま〳〵のことを觀察して、そが意にこれを解すことく、そが眼にこれの寫つるごとく、そこはかとなく筆を馳せて、一々に書きつらね、書きながしたるもの、即ち枕の草紙なり。

されば、全部いづれも皆、一種見聞の記事にして、决して貫結のものにあらず、たとへば兼好の徒然草などの如く、一段一段、一章一章、各々別々のことがらなり。

故に、取り出でゝ、斯く〳〵などいふ、面白き仕搆などのあるにあらねど、其描き出せるところ、いづれも實事ばかりにして、其頃の人情風俗、さては宮中の有様など、一々に今見るが如く、何某の侍從、何某の宰相など、其頃の人々今目前に見るが如く、うつし出されたりければ、史家の參考として益あること、實に源氏にもまさりたり。

殊にその、玲瓏珠の如き文章は、實に美文の範として學ぶべし。

そも〳〵此書に、枕の草紙と名づけしは、始めよりして然るにあらず。全たく後人の撰びたりしところなり。されば其最初にありては、大抵清少納言日記といひしなり。

全部いづれのところにありても、さらに劣れるはあらざれども、香爐峯の段、或は小倉百人一首に出でし、清少納言が和歌、『よをこめて鳥のそら音ははかれども、世に逢坂の關はゆるさじ』といふもの、皆人の知れるところ、こを讀み出でし所以をかきしくだりなど、

尤もすぐれてはなやかなり、其他また、其頃の地名、のさま／＼、いはゆる歌枕なるもの、ことごとく網羅してあまさゞれば、和歌を學ぶにあたりても、此書によりて益すること決して少なきにあらざるなり。

清少納言が傳記にいたりては、いろ／＼の史籍、これをすでに傳へたり、されば今更にいふも、ことごとしければくはしくいはず。その仕へ奉りにし、后の宮の神かくれましてよりは、世をあぢきなきものに思ひて、諸所方々に離流して、其御あとを弔らひまつれり、さて其終りは如何にありしや、まことに朦々として、其正しきを知るべからず。たゞこれだけをこゝに記す。注釋の書、甚だ多しといへども、尤も完全なるものを、北村季吟が春曙抄とす。

さてその注釋本に、春曙抄と名づけしは、枕の草紙、開巻第一、その始めの章に、『春はあけぼの、やう／＼白くなり行く、山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。』云々とあるによりて然るなり、これ些細なることなれども、序を以てこゝに志るす。枕の草紙、源氏物語、其の一端をもうかゞはで、國語國文などいふべきにならず、必ずともに讀むべき書なり。

近着紹介

科學雜談　四芳菲山人著　博文館發行

本書は少年叢書第三編として發行せり、太陽、動物、植物、天文、地文、物理、生理等に關する諸科學をば平易簡明且つ趣味多く述べたるものなり、科學の智識を增さんが爲め這般の書冊發行多からんを望む（定價十錢）

三人武士　櫻痴居士作　博文館發行

永享十一年鎌倉公方持氏逆臣上杉憲實の爲めに弑せら

れたるより下野結城の城主結城氏朝父子等春王、安王、永壽王の三孤を奉して旗擧せし事に筆を起し小河常陸介、神崎右近、小宮山太郎の三人武士を骨子とし、艱難辛苦の間に忠孝節義を全ふしたる歴史的小説なり、か丶る小説は家庭の讀物として毫も其神聖を汚すことなからんか、例の袖珍小説第五編として出づ（定價八錢）

家政

妊婦に就て

NK生

人の身體各用ふる所あり一も虚設なし而てその功尤も大なるもの三あり百物の精華をとり消化輸運以て一身を養ふものは内臓の功なり知覺運動外にしては事物を燭照し内にしては官骸を主宰するものは腦心經なり子女を生育し子孫繁殖せしむるものは何ぞや

余は今妊婦に就て一言せんとす併し妊婦の事を記すには勢その源に遡りて書さねばその絡脈を得ざらん

第一　遺傳

凡て生物には遺傳性なるものあり彼の兎の子は兎にして馬の子に牛の生るゝことはなからん最高等動物吾人人類に於て往々父母の性質を遺傳し又父母の疾病を遺傳することあるは人の能く知る處なりこれを思へば重きを置くべきは結婚にあらずや而るに世人往々これに注意せずして門地財産容貌心術にのみ心を用ゆ迷謬も亦大なりと云ふべし凡て富有なるものは貧賤なるものと結婚するを嫌忌すこの弊や終に血族結婚となり其女子は生ながらにして不具の身となる嗚呼悲哉夫れ血族結婚をなすの害たるや夫婦和せず從て情交疎にしてその設けたるものは必ず孱弱不具のものなることは疑を容れずその實例枚擧に暇あらず近例は昨年十一月東京

附近某素封家に出產ありしにその顏は恰も猫の如く脊椎突出し處々皮膚破れ椎骨を露出し全身長き毛を以て被はれ尾あり通常赤子の大さにして陰部裂け見るも不潔のものなりきこの家の結婚をきゝしにその夫婦は義兄弟なりと云ふ母の異なる兄弟間に結婚は反せしなりと之をきゝなばこの親にしてこの怪兒ある何ぞ怪むに足らんこの野蠻なる所行は禽獸とや云わん彼の無氣力なる支那國を見るに今は齒牙にかくるに足らざる國なりと云ふも人倫五常の道に心を用ふるは我國は遠く及ばず何となれば彼は血族結婚を嚴禁せしは幾千年前なるかこれを見ればたとへ文武具備して東洋第一と云ふも後世如何なる憂患生ずるやも計られず玆に至りて戰慄するのみ

夫れ疾病は何れを問はず人の好まざるところなり併しその內最も嫌忌するは何ぞや余は曰わん癩病肺毒黴毒とその疾病は多く遺傳に源因すと肺病の遺傳最も多し親が肺病にかゝり死せしその子にして肺病を病まざるものは寥々曉星の如し次に癩病の遺傳は余の目擊せし實例を擧んに府下に○○村ありその村には癩病血統多き爲め己れの村以外と結婚する能はず故にその一村範圍內にて血族婚姻をなさねばならぬことは勢の然らしむるところなりこれが爲め日に月に不具者を出し今日は見るかげなき狀態となりたり嗚呼謹むべきは血族結婚ならずや

第二　月經

月經に就て一言を以て攝生法に及ばんとす夫れ月經は子宮より生ずる液にして胎孕の需に備ふるものなり經至りてより經絕つに至るまで約ね三十年なり經未だ至らず子を擧ぐる能はず經絕つも子を設くる能はず病あり經停滯すれば子を生む能はず經の遲速は國土氣候に視ふ故に英國の如きは十四歲より十六歲の間に經至るもの多く印度の如きは十歲乃至十一歲居多とかや印度

にては十一歳にして子を擧ぐるものあり年未だ三十に滿たず早く形態衰ふ復た産孕する能はず之に反し北極に近き國にては二十歳乃至廿四歳に至り始めて經至るものあり六十尙能く子を設くと斯く氣候と比例するものなり婦人たるものはこの月經には最も謹むべきことなり先づ高溫の湯或は冷水に浴するは勿論過度の勞働をなし刺激物をとる等は謹愼すべし我國昔時はこれを身の穢と稱へ他人に接するは勿論室外に出でず神佛の前にだゝず凡て嚴格なりしに近來無敎育の婦女之を忽かせにするもの多きも豈に嘆ずべきの至ならずや

第三　妊娠

抑も妊娠とは男性精液に由て妊孕せる一箇乃至數箇の人卵母躰中の發育を云ふものなり月經期に至りて月水至らず之を待つ次の月至らず又嘔せんと欲し口腔內水分多しこれ胃を累はすなり又乳漸々大となり乳頭長く凸出し周圍色黑し又耳を以て母腹に近き之をきけば胎盤聲顯然辨ずべく鴿鳴の如くその聲は常に母の脉搏と相應すと

夫れ胎兒は母の胎內にあるや血脉及神經も相通じ臍帶を以て母と連通し母の滋養をとりて生活し寒暖共にその感を同ふす故に一擧一動大に謹まずんばあらず唯に精神的のみならず外形その處を得ざれば不可なり即ち不潔の空氣を呼吸して血液を害し運動を怠りて血液循環を妨げ粗惡不消化物を喫し粗暴の行爲をなして胎兒を驚かし藥劑を服し悲劇を見良人と和せざる等都て心身を勞苦せしむるものは大に害を醸すこれよりその注意を說かんとす複雜なるを恐れ箇條に分ち述べんとす

(1)　飲食物

飲食物はその母の身躰に關するのみならず又大に乳質の良否に關するものなれば節制せざるべからず凡て日常慣用ならざるもの又消化し難きもの刺激性例令は胡

椒蒜、唐辛子は謹みて用ひざるを可とす興奮劑は不可なり凡て淡白なるものを撰ぶを可とす全く害なきもの水砂糖茶珈琲の薄きものなり

(2) 衣服

衣服は尋常服にて可なり併し清潔にすることは特に注意せざるべからず又ゆるやかに着し帶は巾廣きは適せず我國にては習慣上「シタジメ」とて細帶を用ふこれは至極適當なり

(3) 動作

父母の品行は謹愼を要す父母不品行にしてその子の完全無缺を望むは孔子の所謂木に緣りて魚を求むるの比か喜怒哀樂は必ずその身に多少の變化を來たすこと必然なり現に脈搏に變化を來たす顔色容貌に異動あるを以て知るべし然らば胎兒を有する間は勉めて謹愼するは必要なり然れども已れの居室にあるや萬感浮び來るものなれば知らす識らす分娩の苦痛を豫想し養育の至難なるを思ひ鬱々として樂ます劇しく心勞をなすときは胎見に感動を波及し之の見は多くは神經病にかゝるものなりその實例は余の知己にあり某は小學校を卒業するまでは毫も異動なかりしが昨年岡山の某學校に入學せしが日ならずして神經病となり今は故郷に歸り空しくその日を送れり

過激の運動は謹むことなれども全く運動せざればその害大なり誠に田舍の婦女を見るに反て安産の多きはその精神慰安の點大に預る處ならんがその運動の適當なるも亦一原因ならんか適當の運動は吾人に欠くべからざることなり。朝より夕まて書齋にありて書籍を友として運動せずして益あらん豈に益なきのみならず反て大害あり彼蒸汽機關を見るに單に油を加へずして運轉してその功をなすや否又休止する久しきに渡れば金銹を生じて使用に供する能はず故に適宜の運動は欠くべからず

(4) 居室

空氣の流通を充分にし不潔物は置くを謹み可成的室内の裝飾は節婦豪傑の畫を以てし勉めて野卑のものを遠けるは胎内教育の要件ならん彼の雷名を天下に轟かしたる佛國「ナポレオン」の胎内にありしときはその母は目にするものは單に豪勇のみを以てせしと即ち義烈の士の傳記を讀み常に英勇の事蹟を捜りたり爲にこの母の心は奈翁の腦髓に貫徹したるを以てならん

第四　産後に就て

分娩は女子の大役とも云ふへきものにして非常に身躰を勞し精神を疲らし身躰の機能その位置を異にす故に分娩後四十二日にして子宮の位置原形に復すこの期を産蓐中と云ふ最も愼重せざるべからず日本古來の習慣には七十五日を經過せざれば正業に就くことを戒めらる産婦の居室は可成雜踏を避けざるべからず床褥は枕を高く保ち得る樣に造らざるべからず即ち夜具等を重ねて後方におき之によらしむべし決して下向に寢すべからず食物は我國にては七十五日間は乾瓢味噌味噌漬の如き淡泊なるもの數種に制限せらる又産婦は食慾旺盛なるものなり然れども必ず一定の物を一定時にとらざるべからず

嬰兒は母躰より離れ始めて自己の肺を以て直接に大氣を呼吸するものなれば極めて注意して取扱ねばならぬその嬰兒を沐浴せしむるは攝氏三十八度即ち躰温と同等温を以て度々休浴せしめ不潔物排泄物を充分洗滌せよ然らざれば關節糜爛の病となればなり嬰兒は頻りに泣くも敢て飢餓にあらず故に夜間は可成的乳を與ふべからず宜しく保護して睡に就かしむべし世上の母は乳房を含まして知らずして呼吸を絶たしめ可憐兒を殺すことあり嗚呼世上母たるものゝ勉も亦至難ならずや世上の常躰を通觀するに子の愛すべきを知りて子の多き爲に或は家業の爲にその子を他人に乳養せしむるも

のあり猶甚しきは乳兒を有する內に懷胎する時は第二の胎兒には乳房に嬰兒の好まざるものを乳房に附して乳を嫌ふの念慮を起さしめ他の食を與ふるものあり余大に玆に慮るところありし爲に今世人に訴んとす

抑も食物の分量も食事の時間とは規律正しからざるべからず大人と雖も胃腑を害することあり乳は嬰兒の食物なりこれを濫與すれば又同一の結果を招くは天日を見るが如し元來その與ふる乳は必しも母躰より製出せらるものならざるべからず何となればその子は今日まで母の躰內にありて母躰と同一の養料をとりて生活するものなり故に滿一ヶ年間は母の乳を與へざるべからず事情の爲め母の乳を與ふる能はざれば他人の乳或は牛乳を用ひよ他人の乳を與ふるに就ては大に注意せねばならぬ

第一乳母の身躰には遺傳病傳染病その他惡疾あるべからず乳母の身躰にこの病あるときはその清浄なる乳兒をして不浄になし血統を傷け恐るべき惡毒を流すに至るべし

第二乳母は可成的實母の年齡と同齡或は之に大差なきものを可とす又乳母の品行不正なる或は無敎育にして惡癖あるものは避けざるべからず乳母たるものは實母の代理者なれば忽諸に托すこと能はず

第三世上には乳外のものを與ふるものあれど誤れりと云ふべし嬰兒上下顎骨に八枚づゝの乳齒の生ずるまでは決して乳外のものを與ふべからず何となれば乳兒の胃臟は消化の機能なければなりとし他のものを與ふるときは長き嚢に物を入れし如く食道より胃を通行し十二指腸大腸を過て肛門に達す唯通行するのみにて消化することなし故に無益無害否無害と云ふ能はずとし內面の皺襞等に物の停滯することありこの時は大害を來たす故に曰く一ヶ年間は乳を與へ他物を與ふべからず

家内經濟（二）

（一名簡易生活）

◎些細なることなれど丸髷に用ゆる手柄のやうなものにても一度買ひ求めばそれにて一月二月は美觀を損せず用ゐて行かるゝなり、併し粗末にせば髪を結ふたびに新しきを買はねばならぬ、さて如何なる手柄が經濟用なるや、近來は髪具流行の頻繁なるに從ひ種々なる手柄の行はるれど、すべて縮緬類は價貴く、油氣つき易けれど、手入一つにては左程贅澤にもあらず、油氣つきたらば揮發油にて洗ひ、蔭干になし置かば自然と新しくなる、揮發油にて洗ひたる後水又は湯にて洗滌するを要せず、唐縮緬は油氣をはぢき價も廉なれども、洗濯すれば目切美觀を損ず、縮緬類に金銀モールなどを縫めたるものは徒に美觀のみにて甚だ不經濟なり、これを用ゆるものは寧贅澤に屬す

◎これより追々暖氣加ふれば毛皮類の敷物も不用となれども、來る冬までの保存法に意を用ゆべし、毛皮類は成るべく濕氣に合せぬやうにし、蒸れぬやうにせねば、美毛も悉く落剝して見る影もなきに至らん、能くすることなれど、毛皮類を大事々々に紙か布帛類又は油紙などに巻きおさめて仕舞ひ込むあれど、これは至つて不得策なり、又は壁などに引かけ置くもあれどこれも宜しからず、それよりも疊の上敷の下か或は空氣と日光の流通宜しき處に保存し置く時はたとへなめし法悪きものにても毛の落剝するやうの難尠し、餘り大事に仕過して簞笥の中に奥深く仕舞置くなどの事あるべからず、筆の序に記す、毛皮類の内にて最も强きは犬の皮なり、これは强くして毛の中途より切れるといふ患なきのみならず、敷きて暖氣多し、猪の皮之に次けど毛の中途より切れる難あり、虎の皮は申分なけれど其價貴く中々容易に手に入られず、狐の皮は暖きこ

と先づ指を屈するものなれど、巾狹くして漸く領巻とするに足るのみ、鹿の皮は裝飾用に止み實用とするに足らず、猫、兎等の毛皮は柔軟なれども落剝し易くこれも實用上には好位地ならず、近來豹の皮と稱して其斑紋の似たるよりそれに擬して賣るものあれど、これは海豹なり、欺かれ玉ふな

◎西洋手拭は頗る經濟的のものなり、其色鼠色を爲し其地荒なりに至らば、垢落の呉絽切の代りにして無暗に用ゐられ、併しそのやうになるまでには六度も七度も洗濯せられて新しく、一年の後にて至つて遣ひふるしとならば雜巾となさば家庭に第一の忠義者となるなり

◎雜巾の事に就て言へば雜巾桶は木製よりも馬穴と稱するもの鐵物屋にあり、これは西洋にてはバタを詰めし後の空鑵をばこれに遣ふ處より、今日は我國にては雜巾用のみにて製し之を販賣す、價は大中小あり、大にて四十錢より貴からず、これは雜巾桶に用ゐらるゝのみならず、輕便なるがためにいろ〳〵臺所用につかはる桶のやうにタガを代ゆる世話もなく即ち經濟的道具なり

◎入山石炭の事につき多くの愛讀諸君より尋ね越されたるが、其賣捌所は淺草馬道二丁目四號十番金富士商會、市内ならば端書を以て申し出せば、先方より持ち來ると聞けり、入山石炭の世に出せし前伊山石炭なるもの出でたるが、其質は前者と同様なり、近來諸新聞の廣告に見ゆ

前號手拭の内職の事につき其所を尋ね越さるゝ向も多し、芝區愛宕町一丁目二番地中川方にて同内職を爲す

雑録

本文は談叢に入るべかりしも編輯の都合により此欄におさむ

狐のレイナード（二）

勝間禪夢



獸王の獅子は此時狼の方を向いて

お前は何か言ふ事が有るか、有るなら早く言ひなさい

と言ひました、貉のグリムバートは狼がまだ答へない内に、再び獸王に向ひ、

ま、ま御待ち下さい、私はりだ閣下に寛上げる事があります、



レイナードも昔は種々の罪を犯したかも知れませんが、過去の事はどうぞ御目に御覧になつて彼は最早今では悉皆前非を後悔した様子で、全く隠者と成つて仕舞ひました、彼は以前住まつた城砦を捨てゝ自分から淋しい場所を撰み隠宅を搆へました、其處に朝晩起臥致しまして少しも世間へは出ないで、懺悔の爲だと言つて食事も一日に一度しか仕ませんので身躰には唯だ一枚の髮毛織の襯衣を着て居る許りで

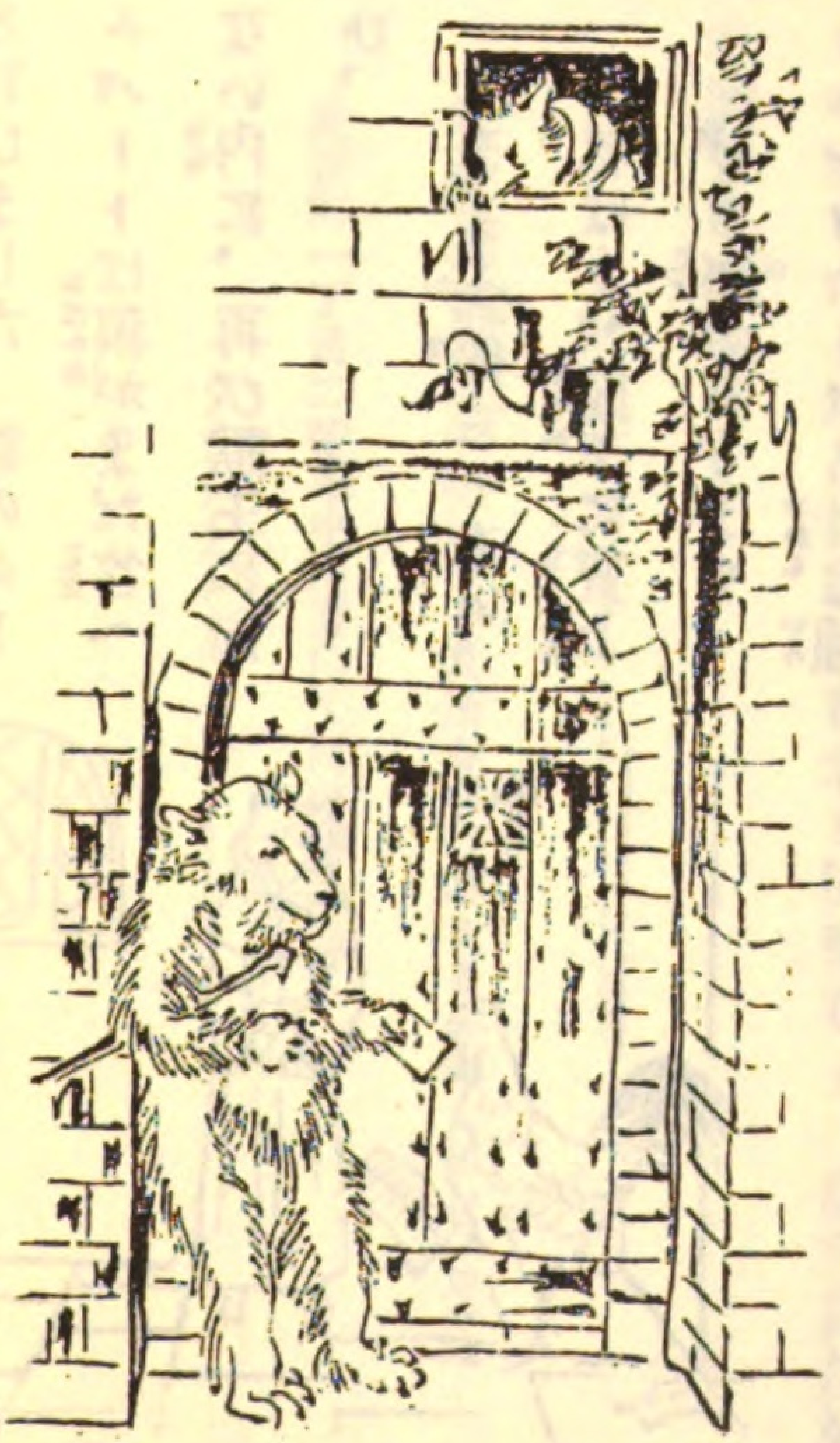
す、それですからレイナードは可愛さうの樣に瘠せ衰へて仕舞ひ、顏色も何もそれは〳〵眞青に成つてしまひました、眞實彼れは後悔して居るのです、



丁度其の時に法廷の外面の方が騷がしくなりました、軈て戶を開いて這入つて來ましたのは、ヘンニングといふ牡鷄が、多くの親族を引連れ長い行列を成して來たのです、

而して數多なる鷄等は一人殘らず泣いて居ます、行列の中央の鷄は一個の寢臺を擔いで來ました、寢臺の上には抓破られたり傷つけられたりして鮮血淋漓と滴り見るも無殘な首のない牝雞の屍骸が載つて居ます、二羽の年若なる牡鷄が泣き叫びながら片手に火把を持ち其他は己が胸を打つてその左右に附添つて居ります、牡雞のヘンニングは獅子の前に來て泣き叫んで歎訴しました、

ああ、閣下、どうぞ惡くらしきレイナードが私の愛女スクラッチフートに加へた害惡の有樣を御覽下さいまし、愚妻と私は此の年齡まで互に力を合はし丈夫な十四の牡雞と愛らしき十四匹の牝雞を育て上げ、樂しく安全な家族の內に幸福を



以て暮らして居りました、私の棲居は或る寺院の庭園で周圍は堅固なる高塀に圍まれて居ます上、六匹の大きな犬が始終私共の家族を守つて呉れますから安心して居りました、ですがレイ奴は屢々此處に這入つて來ようとしたのです、幸に犬に捕



へらるゝを恐れ身を縮め震はして歸へつて仕舞ひました、或日私はレイナードが改心して隱者と成り再び肉類は一片も食はずと誓つたといふ事を聞きましたところ、その翌日彼が私の門前に來り呼鈴を鳴らして是非私に逢つて獸王より言付かつた書面を差上げたいと申しますから、私も獸王よりの御用とあれば容易ならない事と思ひ、急ぎ彼を客室に通し面會致しました、彼は實に人の噂に違はず隱者の様な風采をして身に毛織の襯衣を纏ひ、肩に袈裟を掛け、



頭に僧帽を戴き、全く改善の心を表に顯はしたらしく見受けられました、彼が持つて來た書面は實に獸王の告示であります、オー閣下よ、その書面には汝等自由に歩行すべし若し汝等を苦むる

者有らば立に嚴刑を與へんといふ閣下の難有き御趣意が書いてありましたから、私も嬉しく存じましてレイナードにもその喜ばしさを告げました、レイナードは家に戻り祈禱しなければならないと言つて私に暇を告げ、歸つて行く道すがらも祈禱書を開いて讀みながら歩いて居ます、其故私は數多の子供等を呼び集めてレイナードは全く行淸い隱者に成つた、最早我等に害を加ふるものがないから汝等は何處に往くも心安い事だと話し聞かしました、子供等も大層喜んで門の外へ遊歩に行きました所が、實にどうも大變な事に成つて仕舞つたのです、子供等が門を出るや否やその隅に潜伏して居つたレイ奴突然飛び上つて、十五匹の私の子供等を羽も殘さずに食ひ殺し其上此のスクラチフート（娘）の頭を無殘にも嚙み碎いて仕舞ひました、其時犬が來ましたので御覽の通りやう〳〵屍躰だけ殘して逃げて行きました。



此時獅子はヘンニングの訴を聞き終り、レイナードと從弟のグリムバートの惡行に恐ろしく憤りまして、椅子より立ち上り大聲を發してスクラッツフートの爲めに盛大なる葬儀を營み且つ大理石の墓碑を建つべしと宣告した、そこで獅子は彼が法廷に出席するを拒ばましめざらん爲め最も强き聞えあるブルインといふ熊を使者に送つ



て狐のレイナードを召喚した。
熊のブルインは二倍の速力を以て狐の城砦さして馳行きました、レイナードは己の身に危難の罹るを知る時は必ず此の堅固に建てられた城砦に籠るのです、城砦の下の方に圓形の洞穴があつて、彼はその家族と此穴の中に隠れて居ります、
熊のブルインが此の城砦に到着した時は、門が閉めて在つて極く物靜かでありました、彼は屢々門の戸を叩いて聲高に音なひましたが、内には何の答へもありません、レイナードは門の内から覗いてブルイン一人きりで來たのか又は多勢にて來たのかを見て居ましたが、ブルイン許だといふ事を確めたところで、手に祈禱書を取り上げて、戸を開きました、それは今迄此の本を讀んで居たといふのを見せかける爲なのです、
やあ、ブルイン君か、まあ御這入りなさい、私は少し加減が悪いもんですから獸王の法廷に參りませんでしたが、誠に殘念です、明日は病氣も善くなるだらうと思ひますに依て、屹度出席致します、一躰貴下は何の御用で入らしやいましたか
と巧みに述べ立てました、ブルインは遠き道を走せ來たために、喘ぎつゝ息忙しく
獸王が直ちにお前の出席する様にと待つて居らるるから己と一所に早く來なさい
とさも横柄に獅子の命令を言渡した、狐は熊の前に頭を幾度か下げて
それはどうも御苦勞様でした、ですが今日は最早遲う御坐いますから明朝早く往つた方が善う御坐いましやう、それは兎も角貴下はまあさぞ御暑う御坐いましたらう、こんなに汗を御かきなすつて、本統に今夜は御泊り下さい、何も御坐いませんが是非御馳走致したう御坐いますから、私は肉を廢しました〻めこういふ時には實に閉口するの

です、差上るものといつては蜜より外には何も無いのです、ですがまあ私の心を憐と思召し何卒御縋りなすつて下さい、

と言つた、熊は蜜と聞いて窃に彼の唇を甜め、凡て獸王の命令を忘れて仕舞ひ、

蜜かい、オイ蜜がお前の處にあるのかい、私は蜜が一番好きだ、蜜程旨いものはあるまい、さあ早く出して下さい、實に難有いレイナード大明神樣だ、

狐のレイナードは何か考へ出した樣子でハタと手を打ち

左樣だ、彼處に善いのがある、ブルタイン君見たまい彼方に假小舍がありましやう、彼處にある蜜はそれはどうも素敵に上等な物で、私の家なぞのは到底かなひはしません、貴下の召上る丈は充分御坐います、さあ行きましやう、どうぞ此の道をとう入らしやい、

と言つた、そこでレイナードとブルインの二獸は野原を横切り樵夫と大工の仕事小舍に走せ行きました、今レイナードは小舍の内にラステヒルといふ樵夫が唯一人晝寢して居てその外には誰も居ないといふを知て此處にブルインを連れ出したのである、此の庭の隅に大きな樫の丸太が横に倒して有る、これはラステヒルが板に挽かうとして、先づ縱に割る爲め既に二本の橜木が打ち込んであつて幅は六寸許深さは餘程あるらしい大きな裂目が出來て居る、

レイナードは此處に來り、その裂目を指さし

これが樵夫のラステヒルが蜜を貯蓄して置く場所です、本統にその底に入れてあるのですから、早く貴下の鼻を入れて香氣を嗅いで御覽なさい

と言へば、愚なるブルイン飽までも蜜を得ることを願つて、彼はその丸太の裂目の内に鼻を指し入れ又屆く丈け奥へ兩手をさし込みました、

動いては不可ません、動くと無くして仕舞ひます

といひながら、その時レイナードは木の上に飛乘り、一生懸命に齒に咬はへてとう〱橜木を引拔いて仕舞いました、

ブルインは裂目か再び閉ぢたる爲め、恐しく叫び出した、其の裂目に鼻と手を挾まれて丁度萬力で押される樣に成つて仕舞つた、

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行